敷島町文化財調査報告第８集
（山　梨　県）

御岳田遺跡

小売店舗建設事業に伴う
古墳・平安時代遺跡の発掘調査報告書

1999

敷島町教育委員会

敷島町文化財調査報告第８集
（山　梨　県）

御岳田遺跡

小売店舗建設事業に伴う
古墳・平安時代遺跡の発掘調査報告書

1999

敷島町教育委員会

序　　文

敷島町は、山岳、丘陵、扇状地と起伏に富んだ地形を持つ町です。このような地形が生活環境に適していたのでしょう、本町には縄文時代からの多くの貴重な文化遺産が存在し、その一部が発掘調査によって私達の眼前に姿を現して過去の様子を物語ってくれます。

昭和52年の金の尾遺跡の発見、昭和62年の天狗沢瓦窯の発見に続き、平成４年に店舗建設に伴う試掘調査によって新たに発見されましたのがこの【御岳田遺跡】であります。

古墳、平安時代の住居跡や祭祀に関係する跡など、貴重な成果を得ることができ、敷島町の歴史の１コマを付け加えることができました。

今後は、調査で得られました資料が研究や教育に活用され、２次的成果をあげられるよう努力をしていきたいとおもいます。

最後に、株式会社オギノの文化財保護と考古学に対する深い見識のもとに調査が行われ、ここに報告書を刊行することができ、また、多くの方々よりご協力をいただきましたことに厚く感謝いたし序とします。

平成11年９月

敷島町教育委員会

教育長　**中　山　　昭**

例　　言

1．本報告書は、山梨県中巨摩郡敷島町大下条に所在する御岳田遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、株式会社オギノによる店舗建設に伴う発掘調査である。発掘調査から報告書刊行までの経費は株式会社オギノが負担した。

3．試掘調査は平成４年（1992）11月に行い、この結果を踏まえて発掘調査は平成５年（1993）４月７日より同年７月12日まで行った。整理作業は断続的に行った。

4．発掘調査にあたった組織は、次のとおりである。

調査主体者　　敷島町教育委員会

調査担当者　　大嶌正之（敷島町教育委員会生涯教育課主任）

調査事務局　　敷島町教育委員会・株式会社オギノ

5．本書の執筆、編集は大嶌正之が行い、第３章は石神孝子氏（県埋蔵文化財センター文化財主事）が担当した。遺構、遺物の写真は大嶌が撮影し、遺跡空中撮影は株式会社シン技術コンサルが行った。

6．出土石製品の材質鑑定は、宮里学氏（県埋蔵文化財センター文化財主事）が担当した。

7．発掘調査並びに報告書作成にあたり次の方々よりご指導、ご協力を戴いた。ここにご芳名を記して厚く感謝申し上げる。

羽中田壯雄（敷島町文化財審議会）、十菱駿武（山梨学院大学）、坂本美夫、小林健二、宮里　学、石神孝子（県埋蔵文化財センター）、保坂広昭、池谷建材店　　（順不同、敬称略）

8．発掘調査・整理作業参加者

野中はるみ、三井清広、羽中田俊子、関本芳子、高添美智子、清水光子、浅川松子、小林邦隆、尾澤玉枝、三井裕子、飯室久美恵、北原和江、兼子よし子、山本多美子、石川弘美、若月すみ子、加藤千恵子、小林明美、小菅春江、小林早苗、山路宏美、長田由美子、堤吉彦

（順不同・敬称略）

9．本遺跡の出土遺物及び調査で得られたすべての記録は一括して敷島町教育委員会に保管してある。

凡　　例

遺構図面中のスクリーントーン　　は焼土範囲を示す。

遺物中のスクリーントーン　　は内黒土器、　　は煤付着痕を示す。

出土遺物観察表中、遺物実測図中及び写真図版中の遺物番号は統一したものである。従って写真図版を掲載していない遺物もあるため同図版番号は必ずしも連続番号とはならない。

本　文　目　次

序　　文
はじめに …… 6

第1章　遺跡をとりまく環境
1．遺跡の立地と地理的環境 …… 6
2．遺跡周辺の歴史的環境 …… 6

第2章　遺構と遺物
1．住居跡と遺物 …… 8
2．土坑 …… 18
3．竪穴状遺構 …… 23
4．祭祀遺構 …… 23
5．塚 …… 23
6．遺構外出土遺物 …… 35

第3章　御岳田遺跡出土水晶について …… 36

第4章　まとめ …… 37

挿　図　目　次

第1図　御岳田遺跡・周辺遺跡位置図 …… 5
第2図　御岳田遺跡遺構配置表面図 …… 7
第3図　1号住居跡・出土遺物 …… 8
第4図　2号住居跡・出土遺物 …… 9
第5図　3号住居 …… 10
第6図　3号住居跡・出土遺物 …… 11
第7図　4号住居跡・出土遺物 …… 12
第8図　5号住居跡・出土遺物 …… 13
第9図　6号住居跡・出土遺物(1) …… 14
第10図　6号住居跡・出土遺物(2) …… 15
第11図　1～9号土坑 …… 19
第12図　10～18号土坑 …… 20
第13図　19～27号土坑 …… 21
第14図　土坑出土遺物 …… 22
第15図　1号竪穴状遺構・出土遺物 …… 24
第16図　2号竪穴状遺構・出土遺物 …… 25
第17図　3号竪穴状遺構・出土遺物 …… 26
第18図　1号祭祀遺構・出土遺物(1) …… 27
第19図　1号祭祀遺構・出土遺物(2) …… 28
第20図　1号祭祀遺構・出土遺物(3) …… 29
第21図　2号祭祀遺構・出土遺物(1) …… 31
第22図　2号祭祀遺構・出土遺物(2) …… 32
第23図　塚・出土遺物 …… 33
第24図　遺構外出土遺物 …… 34

表　目　次

第１表　住居跡出土遺物観察表（１～３号住居跡）　……　16
第２表　住居跡出土遺物観察表（４～５号住居跡）　……　17
第３表　土坑観察表　……　18
第４表　土坑出土遺物観察表　……　22
第５表　竪穴状遺物観察表　……　23
第６表　１号竪穴状遺構出土遺物観察表　……　24
第７表　２号竪穴状遺構出土遺物観察表　……　25
第８表　３号竪穴状遺構出土遺物観察表　……　26
第９表　１号祭祀遺構出土遺物観察表　……　30
第10表　２号祭祀遺構出土遺物観察表　……　32
第11表　塚出土遺物観察表　……　33
第12表　遺構外出土遺物観察表（石器・石製品）　……　35
第13表　遺構外出土遺物観察表（土器）　……　35
第14表　遺構時期分類　……　37

写真図版目次

写真図版１　御岳田遺跡全景
写真図版２　１～３号住居跡全景
写真図版３　４～６号住居跡全景
写真図版４　１・３号竪穴状遺構、１号祭祀遺構全景
写真図版５　１～11号土坑全景
写真図版６　12～21号土坑全景
写真図版７　22～27号土坑、塚全景
写真図版８　住居跡出土遺物
写真図版９　遺構出土遺物
写真図版10　遺構外出土遺物・調査参加者

A	御岳田遺跡	E	大庭古墳
B	金の尾遺跡	F	八幡遺跡（竜王町）
C	松ノ尾遺跡	G	元免許遺跡（竜王町）
D	天狗沢瓦窯跡	H	住生塚古墳（双葉町）

第１図　御岳田遺跡・周辺遺跡位置図

はじめに

敷島町大下条地区は、県都甲府市に隣接する本町の中でも平坦地を形成し、尚且つ広範囲に耕作地が残る唯一の場所である。このため近年土地開発が著しく増加をしている地域でもある。1994年に行われた遺跡詳細分布調査の結果をみると遺跡包蔵地の約30%がこの大下条地区に集中している。このため発掘件数も必然的に増大し、また、新たな遺跡の発見にもつながっている。

今回調査された御岳田遺跡もこれまで知られていなかった遺跡の一つである。古墳時代前・中期住居跡３軒、平安時代中期から後期の住居跡３軒の他、古墳時代前期の祭祀跡なども発見されており、これまで空白であった甲府盆地北西部における当該期の歴史環境に新たな資料を齎らす結果となった。

調査面積は約1,500㎡、標高289ｍを測る。

第１章　遺跡周辺の環境

１．遺跡の立地と地理的環境

遺跡の所在する敷島町は、甲府盆地の北西端部に位置し、甲府市の西方に隣接する。町域は南北約15㎞、東西約４㎞で、南北に細長い帯状を呈した町である。町の北部は山梨百名山にも選定されている太刀岡山や茅ヶ岳などの山々が聳え立つ山岳地帯であり、南部は奥秩父山系金峰山に源を持つ荒川によって形成された扇状地域となっている。山岳地域と扇状地域の境目、ちょうど扇頂部には黒富士火山によって形成された台地が延びている。町域の北部約８割が山間地域、南部の２割が扇状地となっている。この扇状地上には市街地が広がり、また、遺跡包蔵地の８割を占める地域ともなっている。

御岳田遺跡は、敷島、双葉両町に跨る道尾山より源を発する貢川の左岸に位置し、貢川によって形成された自然堤防上に営まれた遺跡である。御岳田遺跡南方には弥生時代後期の集落遺跡として知られる金の尾遺跡があり、自然堤防（尾根）上にはその地形を利用して多くの遺跡が存在するものと考えられる。

２．遺跡周辺の歴史的環境

敷島町が属する中巨摩郡は、中央に大河、富士川が南流し扇状地を形成している。このため郡下の殆どの町村は河川氾濫による土砂堆積が顕著にみられ、特に中巨摩郡東部では西から延びる笛吹川の影響もあり、遺跡数は極僅かである。このような環境にあって、敷島町は町域西側に黒富士、茅ヶ岳火山によって形成された通称赤坂台地が町を覆うように延びているため、富士川の影響はまったくみられず、縄文時代より比較的安定した状況にあったようである。しかし、町域東側を南流

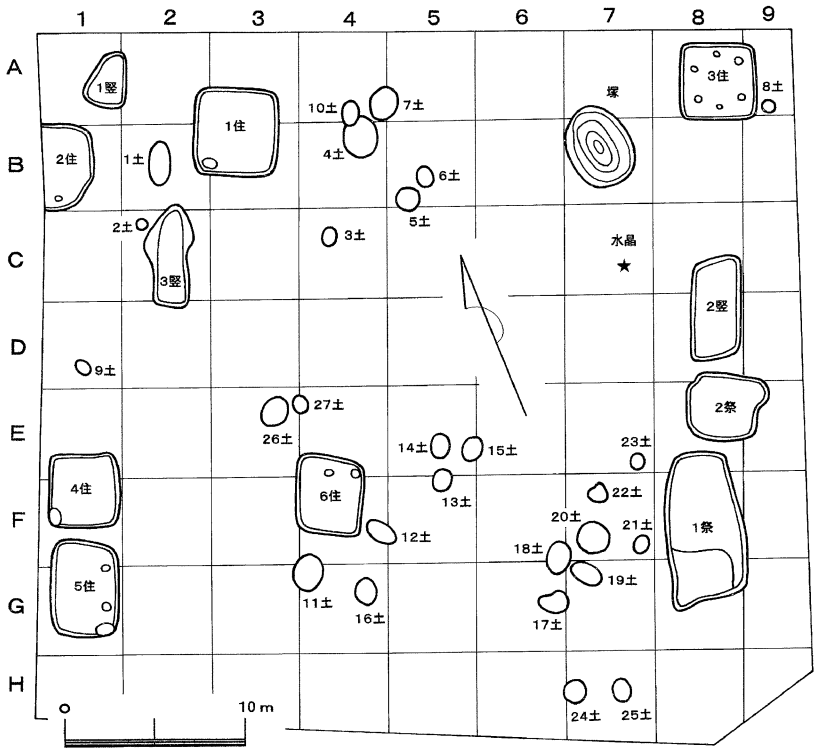
する荒川の氾濫跡や旧河道は所々に看取され、特に平安時代末期から中世初頭にかけて町域東側において比較的大規模な水害を受けていることが最近の発掘調査で明らかとなってきている。

遺跡南方約500ｍには、弥生時代を中心とする金の尾遺跡が所在する。縄文時代前期末の住居をはじめ中、後期、弥生時代後期、古墳時代前期の生活を示す遺構が明らかになってきている。特に近年の調査で弥生時代の住居跡群、方形周溝墓群、そして環豪跡が見つかっており、弥生研究に大きな資料を提示している、

遺跡東方約500ｍに所在するのが松ノ尾遺跡である。平安時代後期を中心とする遺跡で、荒川の氾濫跡や平安後期の金銅製阿弥陀如来坐像２軀などが出土している。布目瓦も出土していることから政治的にも重要な地域であった可能性が高い。

遺跡西方約1.5㎞にある台地を中心に古墳時代後期に築造された古墳群がある。一般的に赤坂台古墳群と呼ばれ、甲府盆地における古墳時代後期の動向を探る一つの資料群をなしている。

敷島町では戦後まもない時期には４～５基の古墳が確認されているが、現在では２基を残すだけとなっている。松ノ尾遺跡からは、荒川の水害によって堆積したと考えられる遺物包含層中から勾玉、耳環、ガラス玉、切子玉、臼玉、鉄製刀子など副葬品色が濃い遺物が出土していることから古墳時代には荒川沿岸にも多くの古墳が築造されていたと考えられよう。



第２図　御岳田遺跡遺構配置平面図

第２章　遺構と遺物

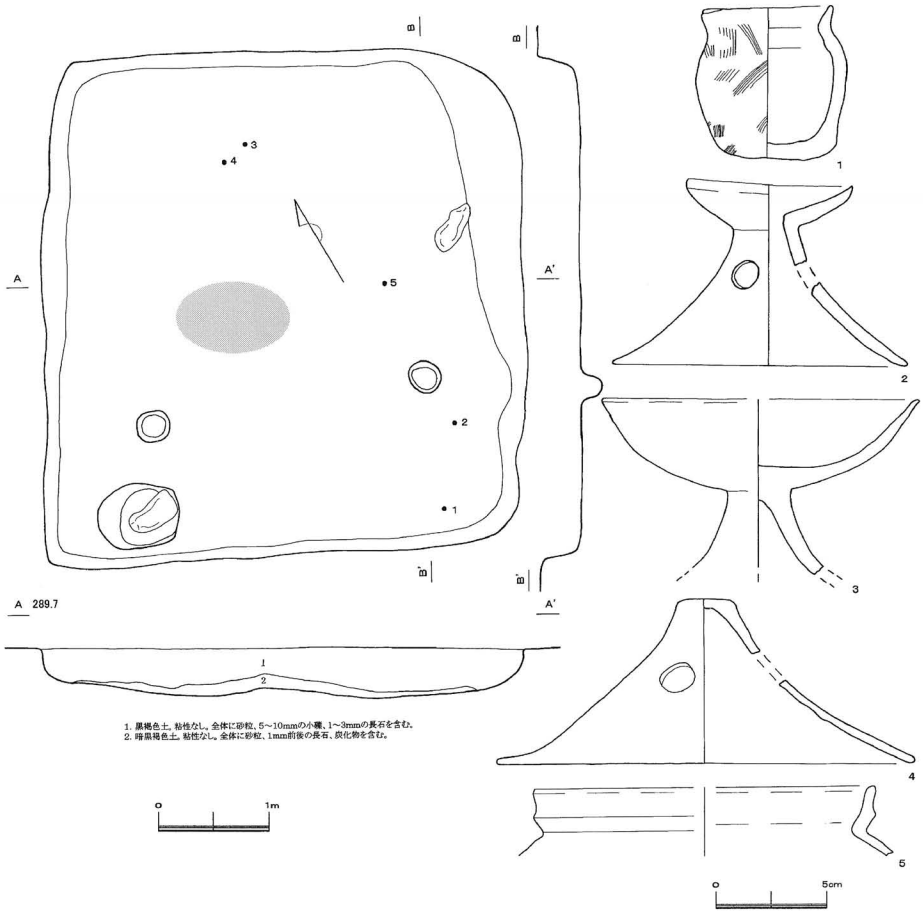
１．住居跡と遺物

御岳田遺跡では、６軒の住居が調査された。内訳は、古墳時代３軒、平安時代３軒である。古墳時代の住居は前期２軒、中期１軒、平安時代は10世紀後半のものが１軒、11世紀末から12世紀前半にかけてのものが２軒である。

●１号住居跡（第３図、図版２）

Ａ、Ｂ－２～３グリットに跨がって位置する。規模は南北4.6ｍ、東西4.4ｍ、壁高は四方とも35㎝を測り、方形を呈す。柱穴は南東、南西コーナーに各１箇所確認され、直径はともに30㎝、深さ20㎝である。

住居中央部分に東西90㎝、南北50㎝の範囲で楕円形状に焼土が深さ７㎝にわたって確認された。炉跡と思われる。この炉跡を中心に小型手づくね土器などを含む多数の土器片が出土した。



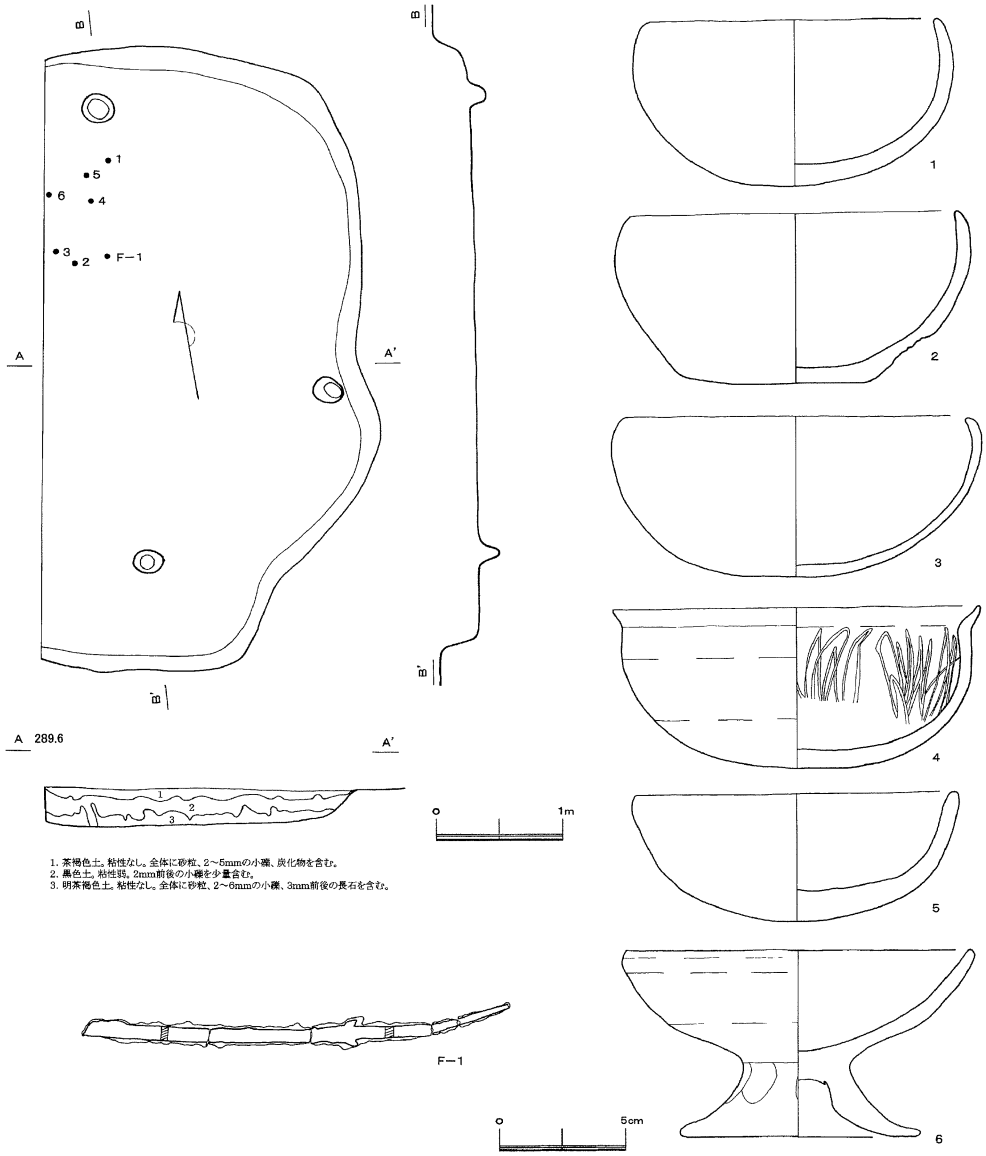
第３図　１号住居跡・出土遺物

●２号住居跡（第４図、図版２）

Ｂ－１グリットに位置する。遺構の西側半分が調査区外になるため本住居の北、南壁の一部と西壁は確認できなかった。

規模は南北５ｍ、東西は調査可能範囲で2.5ｍ、壁高は四方とも平均35㎝を測り、方形を呈す。柱穴は北壁のほぼ中央と推測される付近、東壁中央付近、南東コーナーの合計３箇所で確認され、いずれも直径25㎝、深さ15㎝を測る。

遺物は、遺構中心付近から北壁にかけてまとまって出土する。



第４図　２号住居跡・出土遺物

●３号住居跡（第５・６図、図版２）

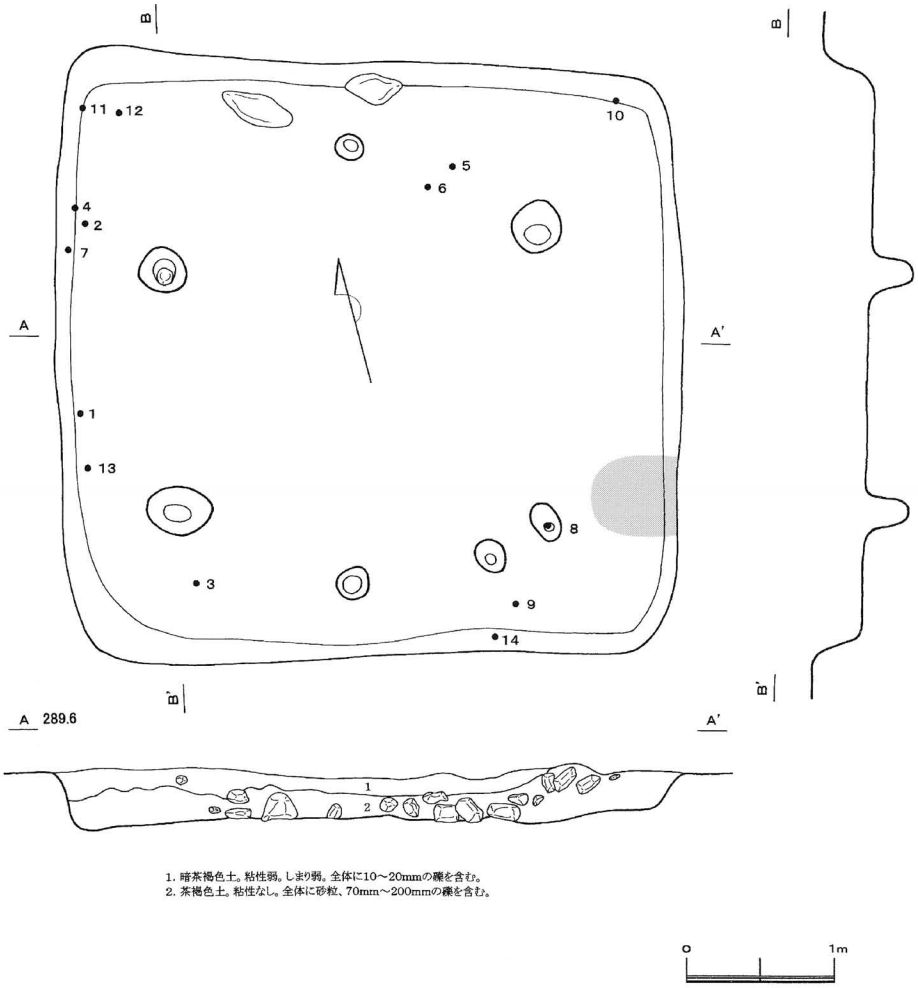
Ａ－８グリットに位置する。規模は南北4.1ｍ、東西4.3ｍ、壁高は西壁45㎝、南、北壁35㎝、東壁25㎝を測り、方形を呈す。

柱穴は直径35㎝、深さ20㎝を測るものが北東、北西、南西コーナーに各１箇所、直径25㎝、深さ15㎝を測るものが北壁、南壁中央付近に各１箇所、同じく直径25㎝を測る穴が南東コーナーに２箇所確認された。

また、東壁南側に幅65㎝、奥行き35㎝の範囲で焼土が全面に確認され、その周辺からも３～10㎜程度の焼土ブロックが認められたことなどからカマド施設の可能性が考えられる。

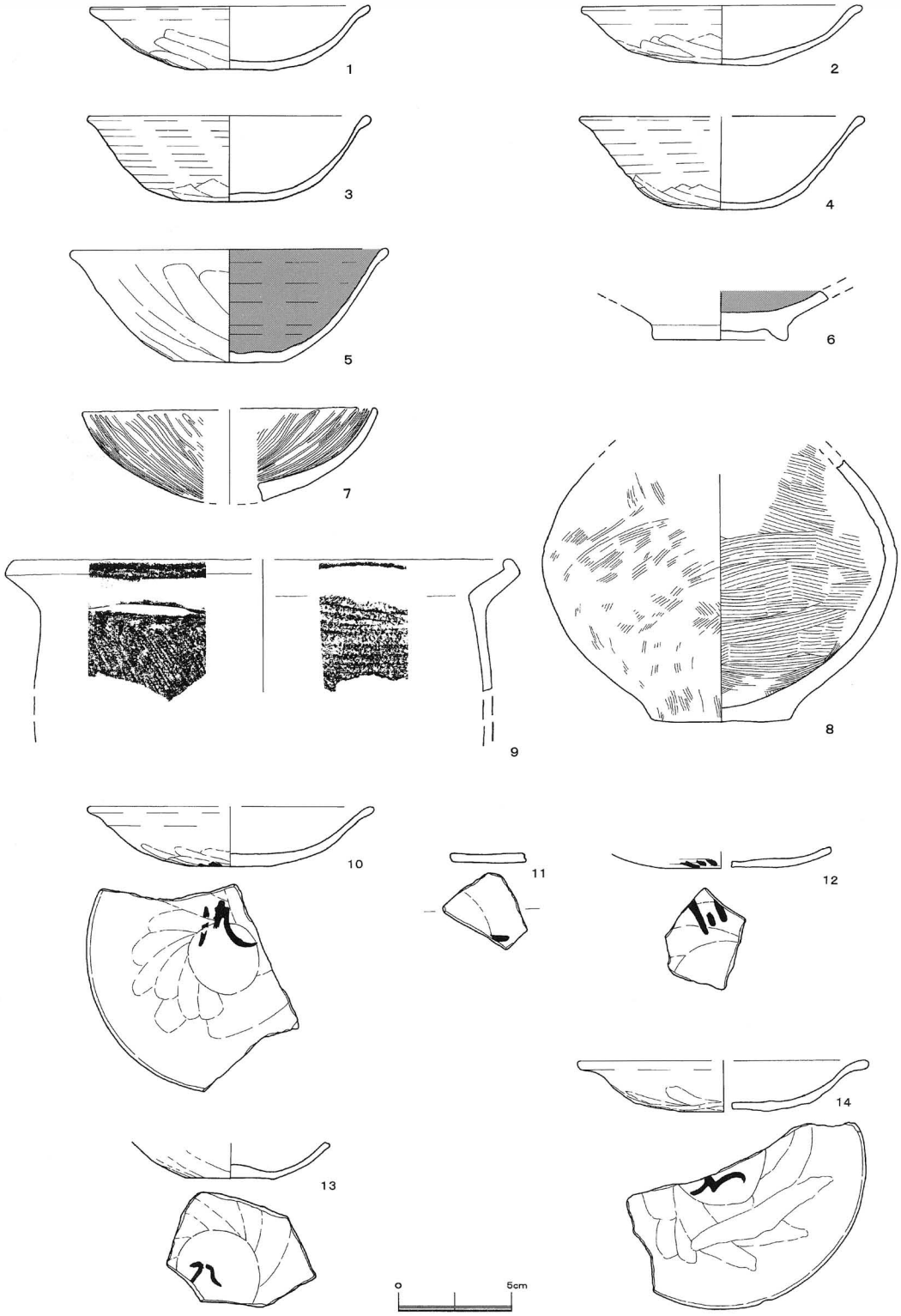
堆積土では、第２層中に花崗岩質の長径20㎝前後の礫が全面に認められ、砂粒も多いことなどから水害が齎らされた可能性が高いと考えられる。

遺物は全体から出土するが、西、南壁付近に多く認められる。



1. 暗茶褐色土。粘性弱。しまり弱。全体に10～20mmの礫を含む。
2. 茶褐色土。粘性なし。全体に砂粒、70mm～200mmの礫を含む。

第５図　３号住居跡



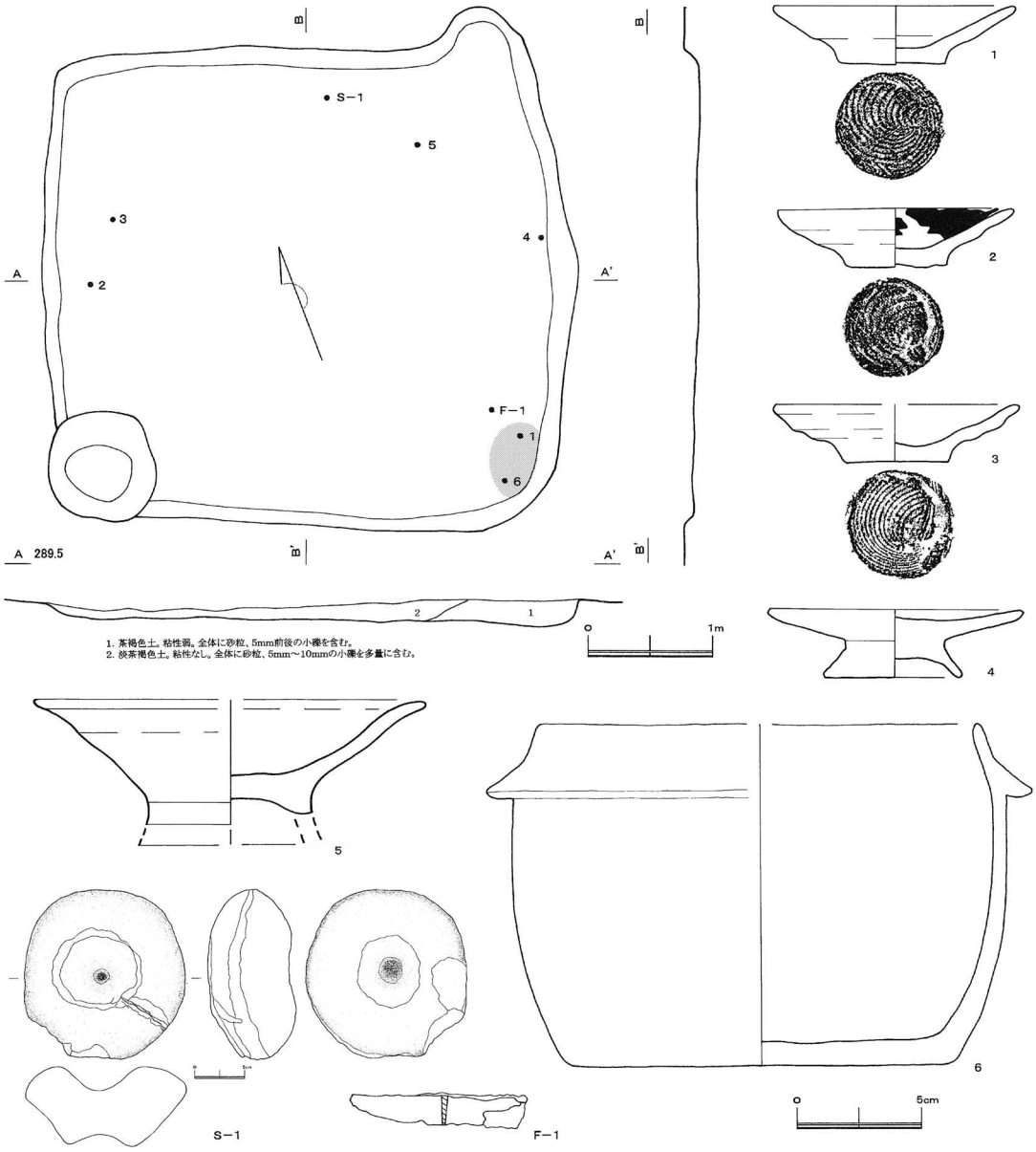
第６図　３号住居跡出土遺物

●４号住居跡（第７図、図版３）

Ｅ、Ｆ－１グリットに位置する。規模は南北3.85ｍ、東西4.25ｍ、北、南、西壁は高さ10㎝、東壁は20㎝を測り、形状は方形を呈す。

南西コーナーに直径90㎝の円形を呈した浅い掘り込みが看取された。また、東南コーナーの東壁付近に直径40㎝の範囲で円形状に焼土が確認された。カマドの可能性が考えられよう。

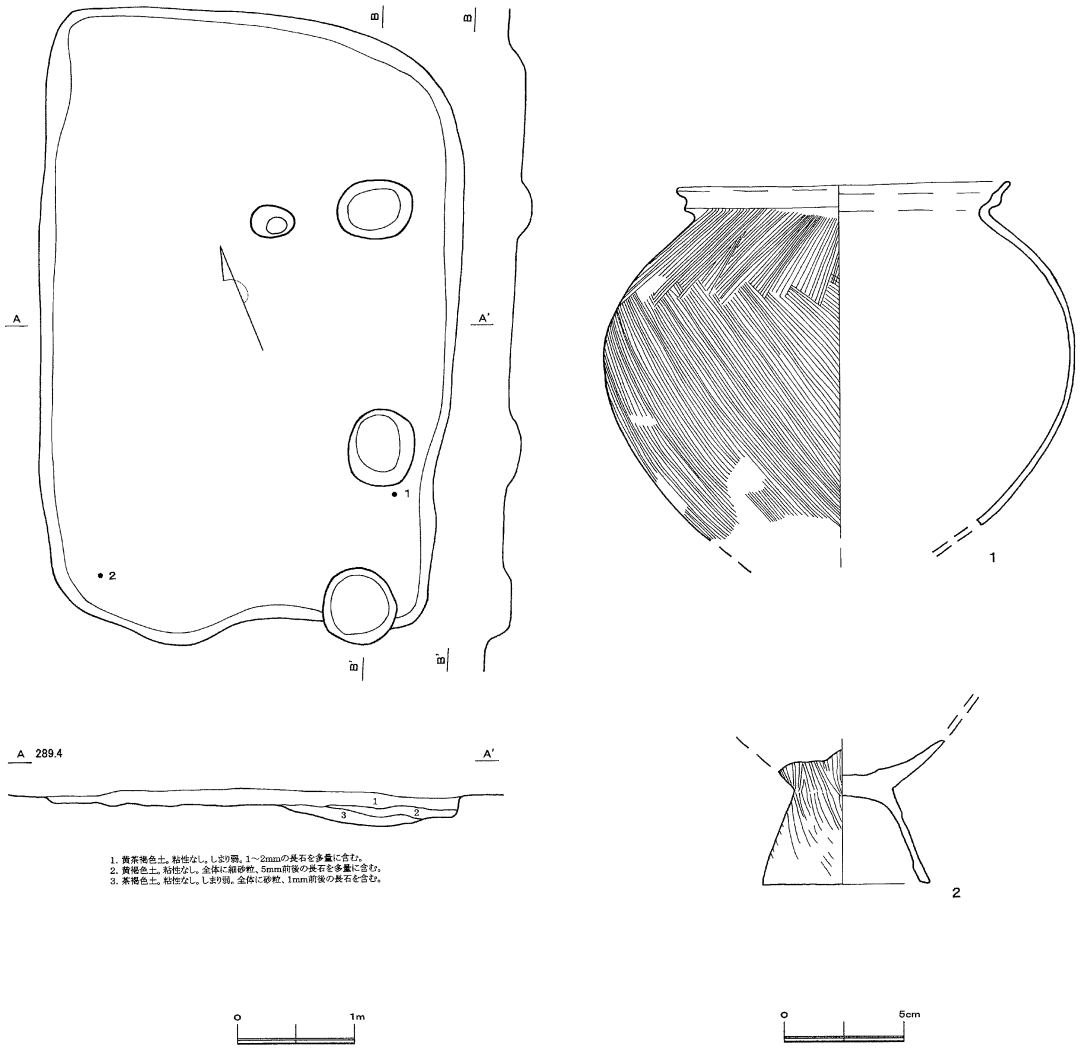
堆積層第２層中に、直径20㎝前後の花崗岩質の礫が混入しており、３号住居と様相が類似する。



第７図　４号住居跡・出土遺物

●５号住居跡（第８図、図版３）

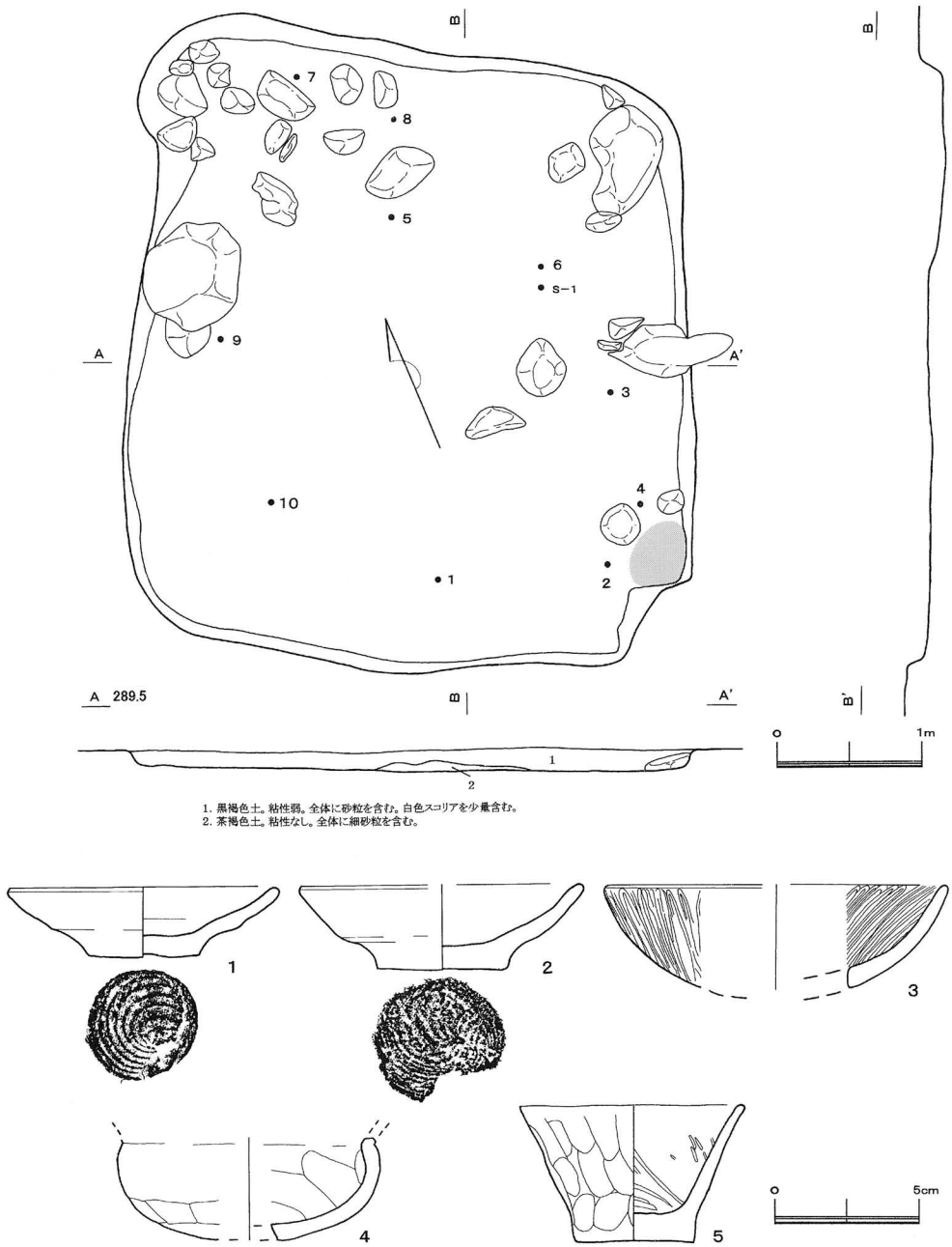
Ｆ、Ｇ－１グリットに位置し、南北5.4ｍ、東西3.6ｍ、の長方形を呈す。北、南、東壁辺おいて、幅60㎝、深さ10㎝ほどの浅く掘りこまれたような箇所が所々に認められた。壁は西側において10㎝、北、南、東壁においても10～20㎝を測る。また、東壁に沿うかたちで、直径60㎝、深さ約15㎝の円形状の穴が３カ所、中央北より直径35㎝の円形状ピットが１カ所認められた。



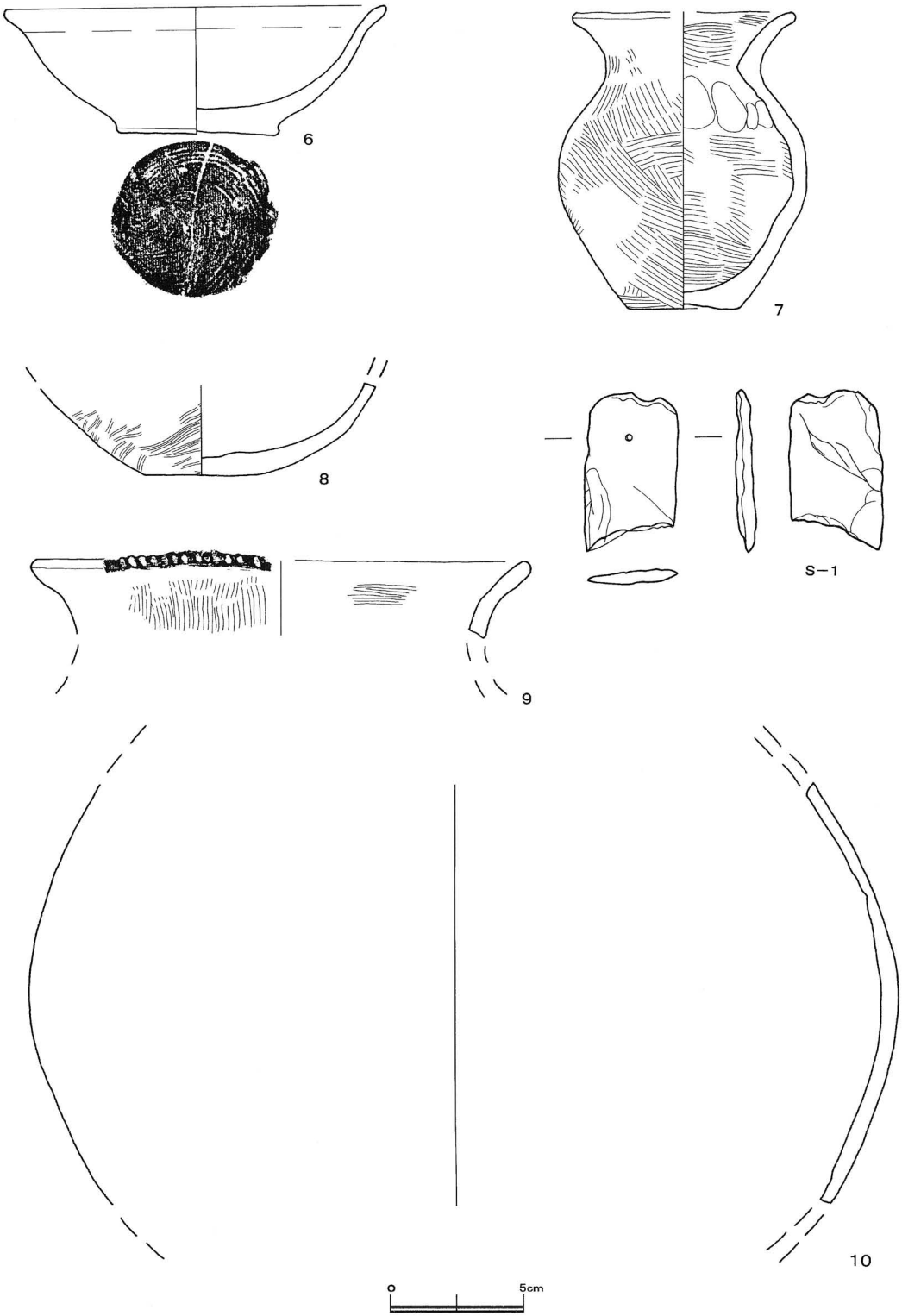
第８図　５号住居跡・出土遺物

●６号住居跡（第９図、図版３）

Ｅ、Ｆ－４グリットに位置し、南北4.35ｍ、東西４ｍの方形を呈す。壁は四方とも高さ約15㎝を測る。東壁南東コーナー付近に直径30㎝の範囲で円形状に焼土が確認された。また、住居中央北側全体に直径20～70㎝の花崗岩質の礫が混入しており、砂粒も多く堆積する。



第９図　６号住居跡・出土遺物（１）



第10図　6号住居跡・出土遺物（2）

【第１表】　１号住居跡出土遺物観察表

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形・技法の特徴
1	土師器	ミニチュア土器	器高 7.1 cm 口径 8.0 cm 底径 4.9 cm	キメ粗い	明茶色	やや良	内面口辺部横方向のハケ目。外面口辺部縦方向のハケ目。外面体部斜め方向のハケ目。内面底部指頭痕有り。
2	土師器	器台	器高 8.4 cm 口径 7.6 cm 底径 13.6 cm	砂粒を多く含み キメ粗い	明茶褐色	良	脚部に直径1.3cmの円孔が3ヶ所外側から内側に向かって穿たれている。外面脚部、内面体部ヘラ磨き。内面脚部朱付着。器受部中央に直径1.1cmの円孔を持つ。
3	土師器	高坏	推定口径 14.6 cm	キメ細かい	明茶褐色	良	外面脚部、内面体部ヘラ磨き。
4	土師器	高坏	底径 19.2 cm	キメ細かい	内面 黒褐色 外面 明茶褐色	良	脚部に直径1.7cmの円孔が3ヶ所外側から内側に向かって穿たれている。外面脚部ヘラ磨き。
5	土師器	S字状口縁甕	口径 15.6 cm	金雲母を含む	赤褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 外面胴部櫛描痕。

2号住居跡出土遺物観察表

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形・技法の特徴
1	土師器	坏	器高 6.7 cm 口径 11.5 cm 底径 5.1 cm	キメ細かい	明茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 外面体部ヘラ磨き。
2	土師器	坏	器高 6.9 cm 推定口径 13.1 cm 底径 7.5 cm	長石、石英を含む	内面 淡茶色 外面 暗茶色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 外面体部ヘラ磨き。 底部ヘラ整形。
3	土師器	坏	器高 6.5 cm 口径 13.5 cm 底径 3.5 cm	砂粒を含み キメ細かく緻密	内面 茶褐色 外面 黒茶色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。 内面体部縦方向のヘラ磨き。 外面体部横方向のヘラ磨き。
4	土師器	坏	器高 6.5 cm 口径 14.7 cm	キメ細かい	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 内・外面体部ヘラ磨き。
5	土師器	坏	器高 5.2 cm 口径 12.8 cm	キメ細かく緻密	赤褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。 内面体部縦方向のヘラ磨き。 外面体部横方向のヘラ磨き。
6	土師器	高坏	器高 7.5 cm 口径 13.8 cm 底径 9.6 cm	キメ細かく緻密	茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。 内・外面体部横方向のヘラ磨き。 脚部に指頭痕有り。
F-1	鉄製品	刀子	現存長 17.3 cm				

3号住居跡出土遺物観察表

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形・技法の特徴
1	土師器	皿	器高 2.8 cm 口径 12.4 cm 底径 3.6 cm	赤色粒子を含み キメ細かく緻密	明茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。外面体部下半ヘラ削り。外面底部ヘラ削り及び墨痕有り。ロクロ右回転。
2	土師器	皿	器高 2.7 cm 口径 12.4 cm 底径 4.3 cm	赤色粒子を含む	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。外面体部下半ヘラ削り。外面底部糸切後、ヘラ削り整形。内面スス付着。ロクロ右回転。
3	土師器	坏	器高 3.9 cm 口径 12.5 cm 底径 4.2 cm	赤色粒子を含む	明茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。外面体部下半ヘラ削り。外面底部ヘラ削り。内面煤付着。ロクロ左回転。
4	土師器	坏	器高 4.2 cm 口径 12.5 cm 底径 4.7 cm	キメ細かく緻密	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 外面体部下半ヘラ削り。 外面底部ヘラ削り。
5	土師器	坏	器高 5.1 cm 口径 14.0 cm 底径 5.1 cm	キメ細かく緻密	内面 黒色 外面 明茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。 外面底部及び体部ヘラ削り。 内黒土器。ロクロ右回転。
6	土師器	高台付皿	底径 5.9 cm	赤色粒子を含む	内面 黒色 外面 淡茶色	良	外面底部ナデ仕上げ。 内黒土器。
7	土師器	高坏	口径 13.0 cm	砂粒を含む	茶褐色	良	内・外面体部に放射状のヘラ磨きが施される。
8	土師器	壷	底径 6.3 cm	砂粒を含む	茶褐色	良	内面胴部横方向のハケ目。 外面胴部斜め方向のハケ目。
9	土師器	甕	口径 22.0 cm	金雲母を多く含む	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 内面胴部横方向のヘラナデ。 外面胴部斜め方向のハケ目。
10	土師器	皿	推定器高 2.7 cm 推定口径 12.6 cm 底径 3.6 cm	キメ細かく緻密	明茶褐色	良	外面底部に「ん」の墨書有り。 口辺部横ナデ仕上げ。外面底部及び体部下半ヘラ削り。ロクロ右回転。
11	土師器			キメ細かい	明茶褐色	良	外面底部に「丶」の墨書有り。
12	土師器			キメ細かい	茶褐色	良	外面体部下半に「凵」の墨書有り。
13	土師器	坏	底径 3.8 cm	赤色粒子を含む	淡茶色	良	外面底部に「八」の墨書有り。 外面底部糸切後、ヘラ整形。
14	土師器	皿	推定器高 2.3 cm 推定口径 12.8 cm 推定底径 3.8 cm	赤色粒子を含み キメ細かく緻密	茶褐色	良好	外面底部に「丿」の墨書有り。 口辺部横ナデ仕上げ。 外面底部及び体部下半ヘラ削り。

【第２表】　４号住居跡出土遺物観察表

No	器種	器　形	計　測　値	胎　土	色　調	焼成	器形・技法の特徴
1	土師質土器	小　皿	器高 2.4 cm 口径 9.8 cm 底径 4.4 cm	金雲母を多く含む	茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。 外面全体に煤付着。 底部糸切痕。ロクロ右回転。
2	土師質土器	小　皿	器高 2.4 cm 口径 9.6 cm 底径 4.1 cm	金雲母を多く含む	茶褐色	良	内面に煤付着。 底部糸切痕。 ロクロ右回転。
3	土師質土器	小　皿	推定器高 2.35cm 推定口径 9.8 cm 推定底径 4.4 cm	金雲母を多く含む	茶褐色	良	底部糸切痕。
4	土師質土器	高台付皿	器高 2.75cm 口径 10.3 cm 底径 5.6 cm	砂粒、金雲母を含み、キメ細かい	淡茶色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。 ロクロ右回転。
5	土師質土器	高台付坏	推定口径 15.8 cm	砂粒、金雲母を含む	茶褐色	良	ロクロ右回転。
6	土師質土器	羽　釜	器高 13.9 cm 口径 17.6 cm 底径 16.2 cm	砂粒、金雲母を含む	茶褐色	良	
S-1	石製品	凹　石	最大幅 16.5 cm 最大厚 8.7 cm	石材　安山岩			
F-1	鉄製品	刀　子	現存長 7.1 cm 幅 1.2 cm				

５号住居跡出土遺物観察表

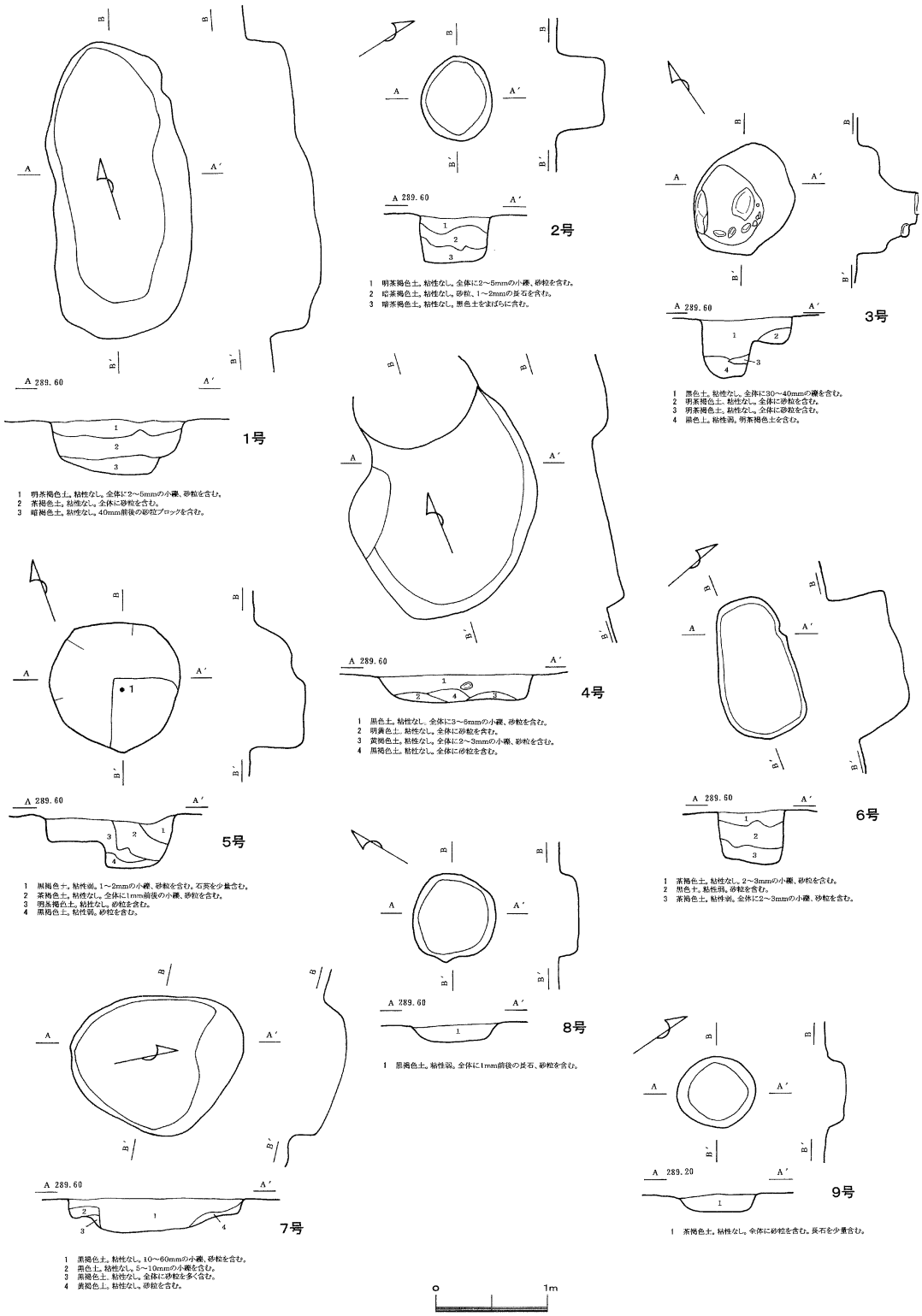
No	器種	器　形	計　測　値	胎　土	色　調	焼成	器形・技法の特徴
1	土師器	S字状口縁甕	口径 14.1 cm	砂粒を含む	茶褐色	良	外面口辺部から頸部にかけて斜め方向のハケ目。外面頸部から胴部にかけて縦方向のハケ目。
2	土師器	甕	底径 7.1 cm	金雲母を含む	茶褐色	良	外面縦方向のハケ目。

６号住居跡出土遺物観察表

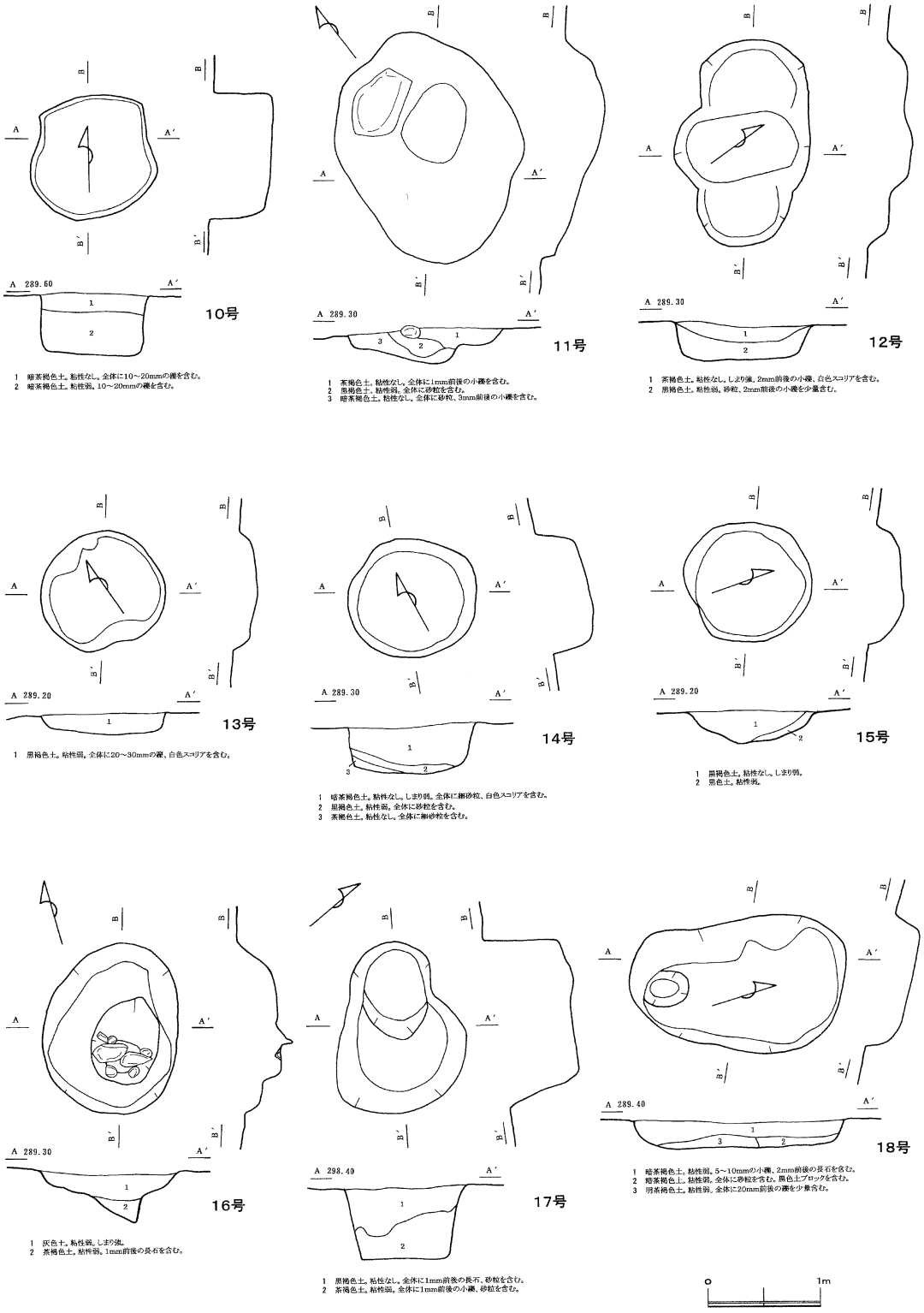
No	器種	器　形	計　測　値	胎　土	色　調	焼成	器形・技法の特徴
1	土師質土器	小　皿	器高 2.5 cm 口径 9.55cm 底径 4.0 cm	金雲母を多く含み、キメ細かい	茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。 底部糸切痕。 ロクロ右回転。
2	土師質土器	小　皿	推定器高 2.95cm 推定口径 9.9 cm 推定底径 4.5 cm	金雲母を多く含み、キメ細かい	黒茶色	良好	内・外面体部ヘラ磨き。 底部糸切痕。
3	土師器		推定口径 11.8 cm	砂粒を含む	明茶色	良	内・外面体部ヘラ磨き。
4	土師器		胴最大径 9.2 cm	砂粒を含む	明茶色	良	外面体部ヘラ削り後、横ナデ。 内面体部に指頭痕有り。
5	土師器	手捏ね土器	器高 4.8 cm 推定口径 8.05cm 底径 4.2 cm	金雲母を含む	暗灰色	良	口縁部に注ぎ口と看られる反りを有す。 内面体部ヘラ磨き。 外面体部に指頭痕有り。
6	土師質土器	坏	器高 4.8 cm 口径 14.2 cm 底径 5.9 cm	金雲母を多く含む	黒茶色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 内面体部ヘラ磨き。 底部糸切後、ナデ仕上げ。
7	土師器	小型壷	器高 11.15cm 推定口径 8.0 cm 底径 2.1 cm	金雲母、石英を含む	茶褐色	良	内面口辺部横方向のハケ目。 外面全体に不規則なハケ目。 頸部に指頭痕有り。
8	土師器		底径 4.1 cm	キメ細かい	内面　茶褐色 外面　暗茶色	良	内面ナデ仕上げ。 外面底部ヘラ磨き。
9	土師器	甕	推定口径 18.2 cm	金雲母を含む	黒茶色	良	口縁部にヘラ状工具によるキザミを有す。 内面口辺部横方向のハケ目。 外面口辺部縦方向のハケ目。
10	土師器	壷	胴最大径 32.4 cm	砂粒を含む	内面　淡茶色 外面　赤褐色	良	内面ナデ仕上げ。
S-1	石製品	石　錘	最大幅 3.4 cm 最大厚 0.6 cm	石材　粘板岩			

【第３表】　土 坑 観 察 表

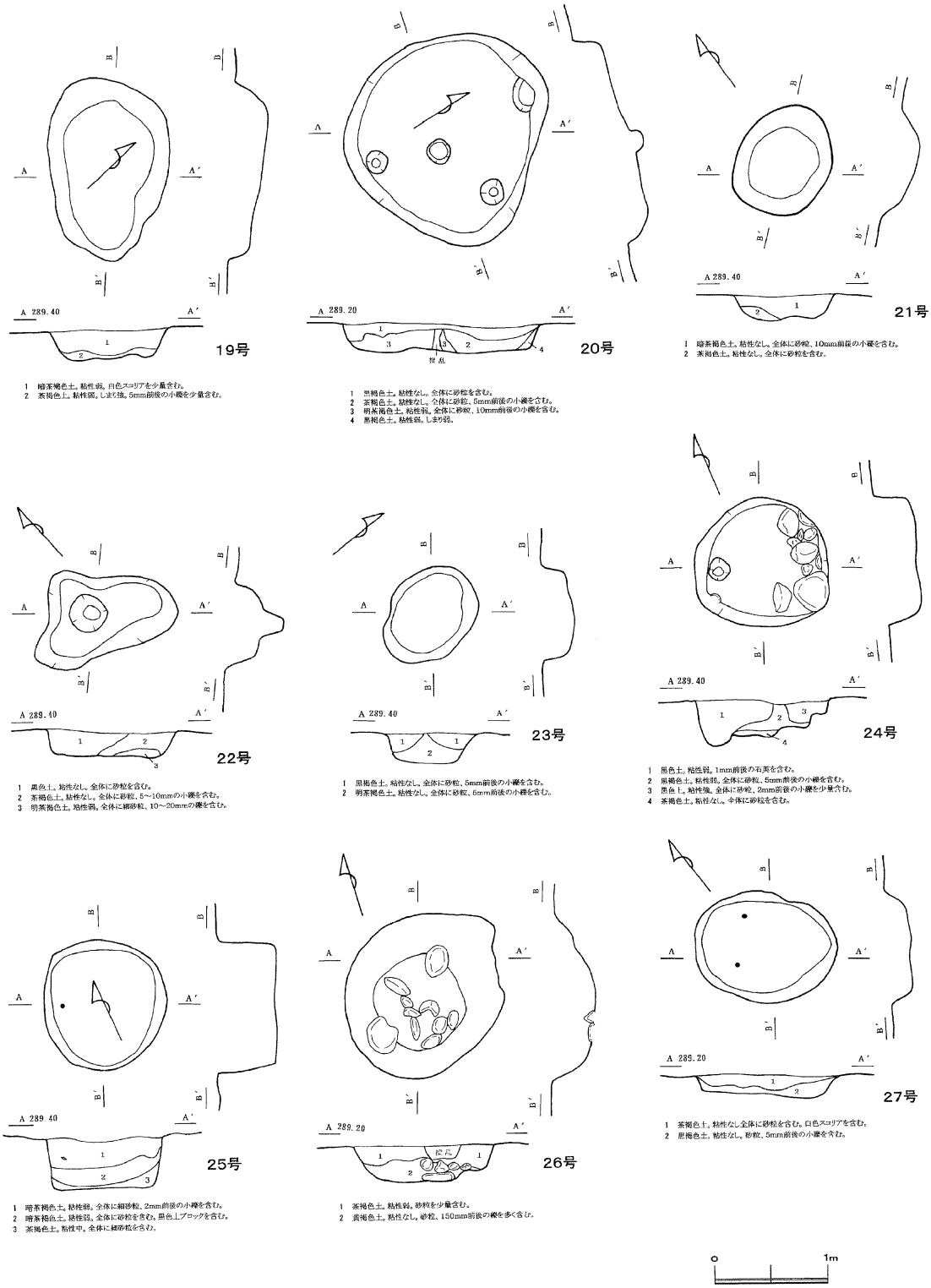
土坑No	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	出　土　遺　物	グリット
1	260	130	50		B－2
2	80	65	45		C－2
3	105	85	53		C－4
4	175	160	25		B－4
5	120	120	50	ミニチュア土器	B－5
6	135	70	55		B－5
7	165	130	30	坏　小　片	A－4
8	75	75	15	甕　小　片	A－9
9	75	67	15		D－1
10	140	100	57		A－4
11	210	160	40		G－4
12	190	125	35		F－4
13	115	110	20		F－5
14	115	110	40	甕　小　片	E－5
15	120	110	30		E－5
16	160	125	44		G－4
17	160	105	80		G－6
18	195	130	28		F－6
19	165	110	28		G－7
20	195	190	37	甑の底部・高坏の脚部	F－7
21	103	80	23		F－7
22	120	75	50		F－7
23	97	77	28		E－7
24	120	120	42		H－7
25	125	110	55	皿	H－7
26	165	135	40		E－3
27	130	102	20	小皿２点	E－3


1号
1 明茶褐色土。粘性なし。全体に2～5mmの小礫、砂粒を含む。
2 茶褐色土。粘性なし。全体に砂粒を含む。
3 暗褐色土。粘性なし。40mm前後の砂粒ブロックを含む。
2号
1 明茶褐色土。粘性なし。全体に2～5mmの小礫、砂粒を含む。
2 暗茶褐色土。粘性なし。砂粒、1～2mmの長石を含む。
3 暗茶褐色土。粘性なし。黒色土をまばらに含む。
3号
1 黒色土。粘性なし。全体に30～40mmの礫を含む。
2 明茶褐色土。粘性なし。全体に砂粒を含む。
3 明茶褐色土。粘性なし。全体に砂粒を含む。
4 黒色土。粘性弱。明茶褐色土を含む。
4号
1 黒色土。粘性なし。全体に3～5mmの小礫、砂粒を含む。
2 明黄色土。粘性なし。全体に砂粒を含む。
3 黄褐色土。粘性なし。全体に2～3mmの小礫、砂粒を含む。
4 黒褐色土。粘性なし。全体に砂粒を含む。
5号
1 黒褐色土。粘性弱。1～2mmの小礫、砂粒を含む。石炭を少量含む。
2 茶褐色土。粘性なし。全体に1mm前後の小礫、砂粒を含む。
3 明茶褐色土。粘性なし。砂粒を含む。
4 黒褐色土。粘性弱。砂粒を含む。
6号
1 茶褐色土。粘性なし。2～3mmの小礫、砂粒を含む。
2 黒色土。粘性弱。砂粒を含む。
3 茶褐色土。粘性弱。全体に2～3mmの小礫、砂粒を含む。
7号
1 黒褐色土。粘性なし。10～60mmの小礫、砂粒を含む。
2 黒色土。粘性なし。5～10mmの小礫を含む。
3 黒褐色土。粘性なし。全体に砂粒を多く含む。
4 黄褐色土。粘性なし。砂粒を含む。
8号
1 黒褐色土。粘性弱。全体に1mm前後の長石、砂粒を含む。
9号
1 茶褐色土。粘性なし。全体に砂粒を含む。長石を少量含む。
0
1m

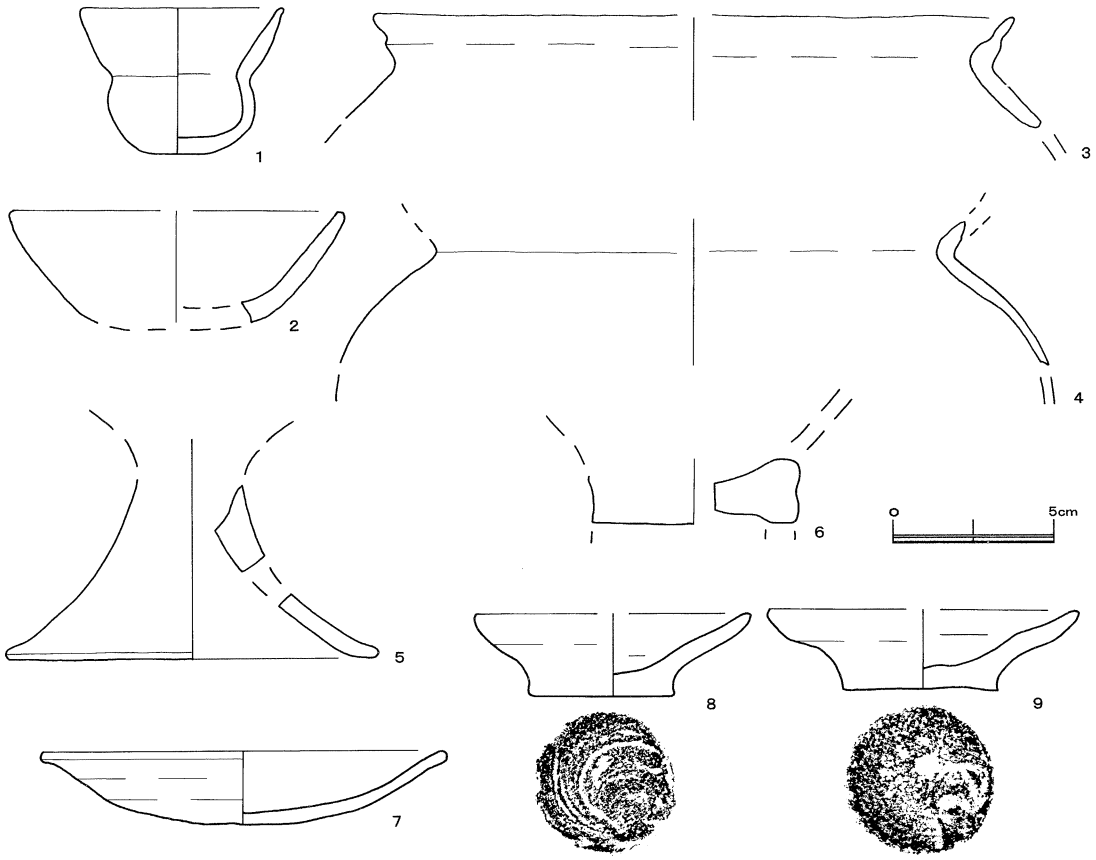
第11図　1～9号土坑



第12図　10～18号土坑



第13図　19～27号土坑



第14図　土坑出土遺物

【第４表】　土坑出土遺物観察表

No	器種	器　形	計　測　値	胎　土	色　調	焼成	器形・技法の特徴	土坑番号
1	土師器	ミニチュア土器	器高 4.55cm 口径 6.4 cm 底径 2.0 cm	金雲母を含む	暗茶色	良	ミニチュアの坩。 口縁部から頸部にかけて横ナデ仕上げ。	５号土坑
2	土師器	坏	推定口径 10.0 cm	キメ細かく緻密	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。	７号土坑
3	土師器	S字状口縁甕	推定口径 19.6 cm	キメ粗い	茶褐色	良	外面胴部ハケ目。	８号土坑
4	土師器	甕		金雲母を少量含む	黒茶色	良	内・外面ナデ仕上げ。	14号土坑
5	土師器	高坏	底径 11.5 cm	長石、石英を多く含む	明茶褐色	良	脚部に直径1.4cmの円孔が外側から内側に向かって３ヶ所穿たれている。 裾部横ナデ仕上げ。	20号土坑
6	土師器	甑	底径 6.4 cm	金雲母を含む	茶褐色	良	底部中央に直径1.1cmの円孔を有す。	20号土坑
7	土師器	皿	器高 2.3 cm 口径 12.2 cm 底径 3.0 cm	キメ細かく緻密	明茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。 外面底部ヘラ整形。	25号土坑
8	土師質土器	小皿	器高 2.5 cm 口径 9.4 cm 底径 4.5 cm	金雲母を多く含む	黒茶色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 底部糸切痕。 ロクロ右回転。	27号土坑
9	土師質土器	小皿	器高 2.6 cm 口径 9.4 cm 底径 4.5 cm	金雲母を多く含む	灰茶色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 底部糸切痕。 ロクロ右回転。	27号土坑

3．竪穴状遺構

【第５表】　竪穴状遺構観察表（第15～17、図版４）　（単位：ｍ）

遺構番号	遺構規模	深さ	形状	グリット	備考
１号	南北３、２ 東西最大2.6　最小1.7	0.4 東側0.08	不整形	Ａ－１	遺構北側に直径0.2～0.4の花崗岩質の礫混入
２号	南北４、45 東西２、２	0.25	長方形	Ｃ－８ Ｄ－８	
３号	南北５、７ 東西２、０	0.45	長方形	Ｃ－２	

●１号祭祀遺構（第18図、図版４）

Ｆ－８、Ｇ－８グリットに位置する。規模は、南北8.3ｍ、東西4.75ｍの長方形を呈す。南壁から北へ３ｍのラインまでは深さ17㎝、３ｍラインから北壁までが深さ50㎝となる。このため遺構南側が東西約５ｍ、南北３ｍの規模でテラス状を形成する。

テラスより北側からは絶えず水が湧き出していた。遺跡内において水が湧く場所は本遺構しかなく、また、テラス北側の湧水落ち込み部分からは比較的大型の壺やＳ字甕などが一列に並び西側に倒れた状態で出土していることなどから水に関係する祭祀遺構と考えられる。

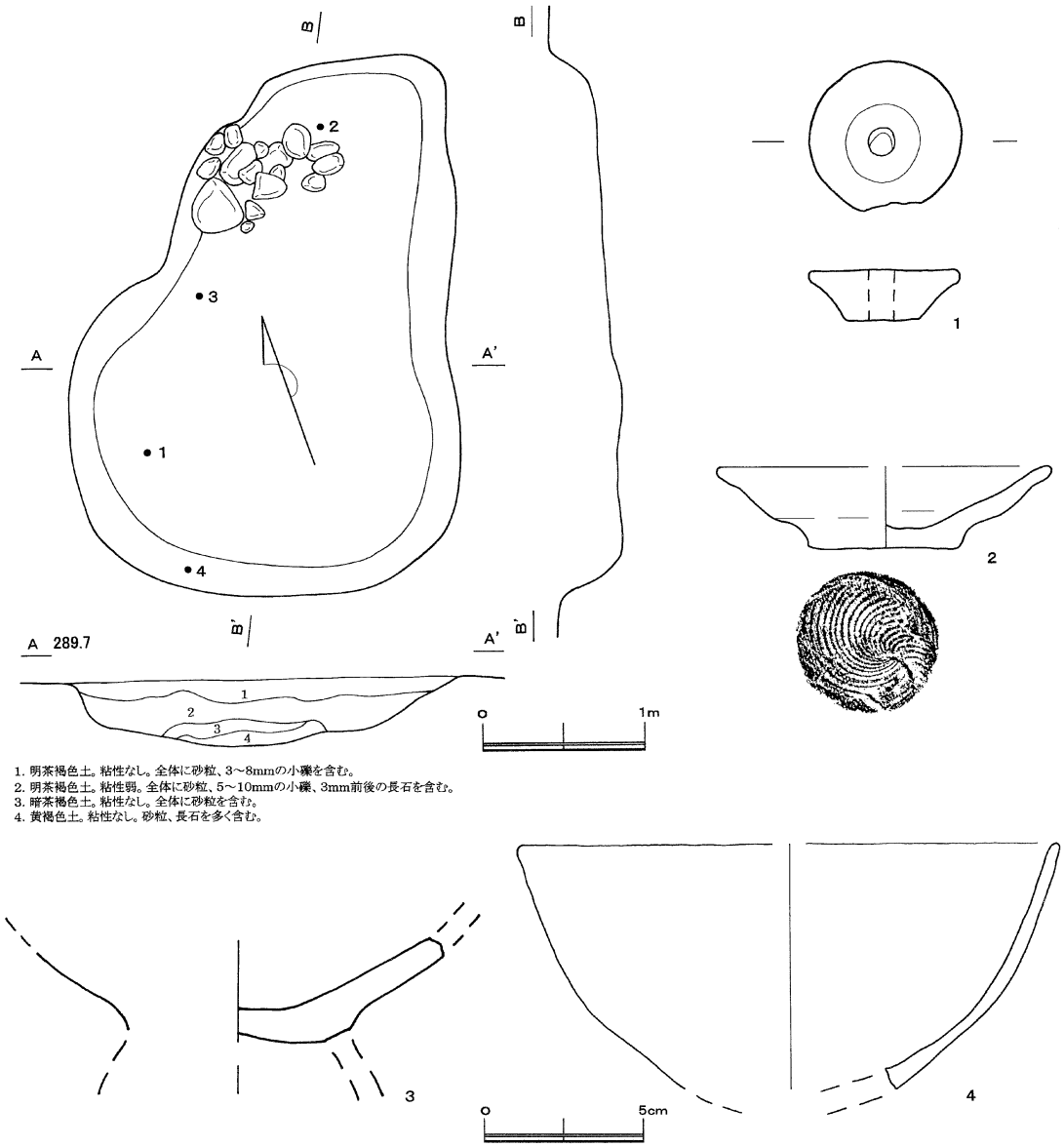
●２号祭祀遺構（第21図）

Ｅ－８グリットに位置し、規模は南北3.8ｍ、東西3.95ｍの方形状を呈す。深さは南壁が42㎝とやや深いほかは、北、東、西とも20～27㎝を測る。遺構中央やや西側及び北壁西より直径60㎝の範囲で焼土が確認された。

本遺構も１号祭祀遺構同様湧水が認められる。また、全体から遺物が出土しているが、その年代は古墳時代前期の壺や10世紀中葉の坏、12世紀初頭の小皿といった不連続で時代の統一性を欠くものである。

●塚（第23図、図版７）

Ｂ－７グリットに位置し、南北軸4.85ｍ、東西軸3.95ｍの楕円形状を呈す。塚底部の外郭には直径60㎝前後の花崗岩質の礫が敷かれ、その上に直径10～20㎝の花崗岩質の礫が71.7㎝の高さまで墳丘状に積まれる。礫の間からは12世紀初頭の土師質坏や高坏の脚部などが出土しているが、石郭などの施設は無くただ礫を墳丘状に積み上げたという状況であった。

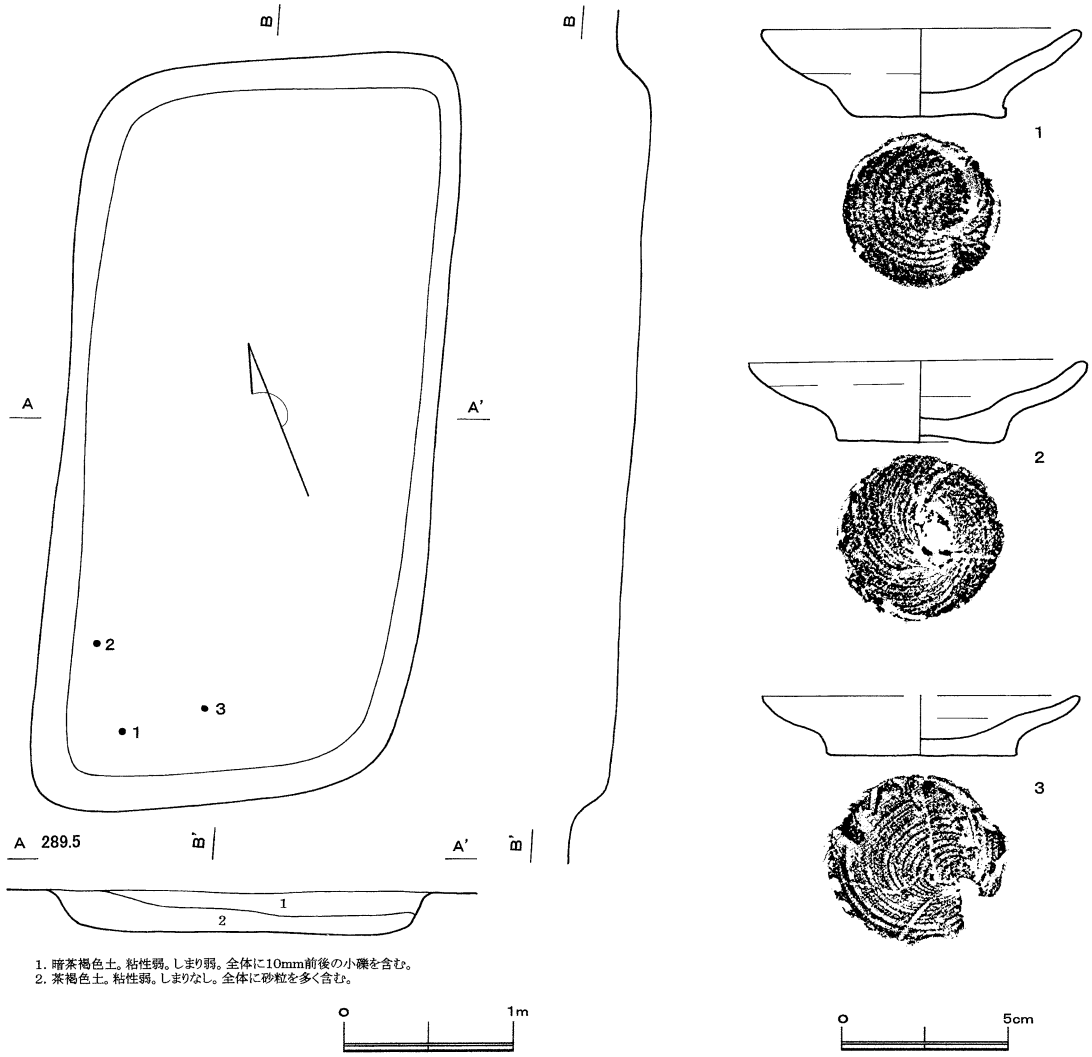


1. 明茶褐色土。粘性なし。全体に砂粒、3～8mmの小礫を含む。
2. 明茶褐色土。粘性弱。全体に砂粒、5～10mmの小礫、3mm前後の長石を含む。
3. 暗茶褐色土。粘性なし。全体に砂粒を含む。
4. 黄褐色土。粘性なし。砂粒、長石を多く含む。

第15図　1号竪穴状遺構・出土遺物

【第6表】　1号竪穴状遺構出土遺物観察表

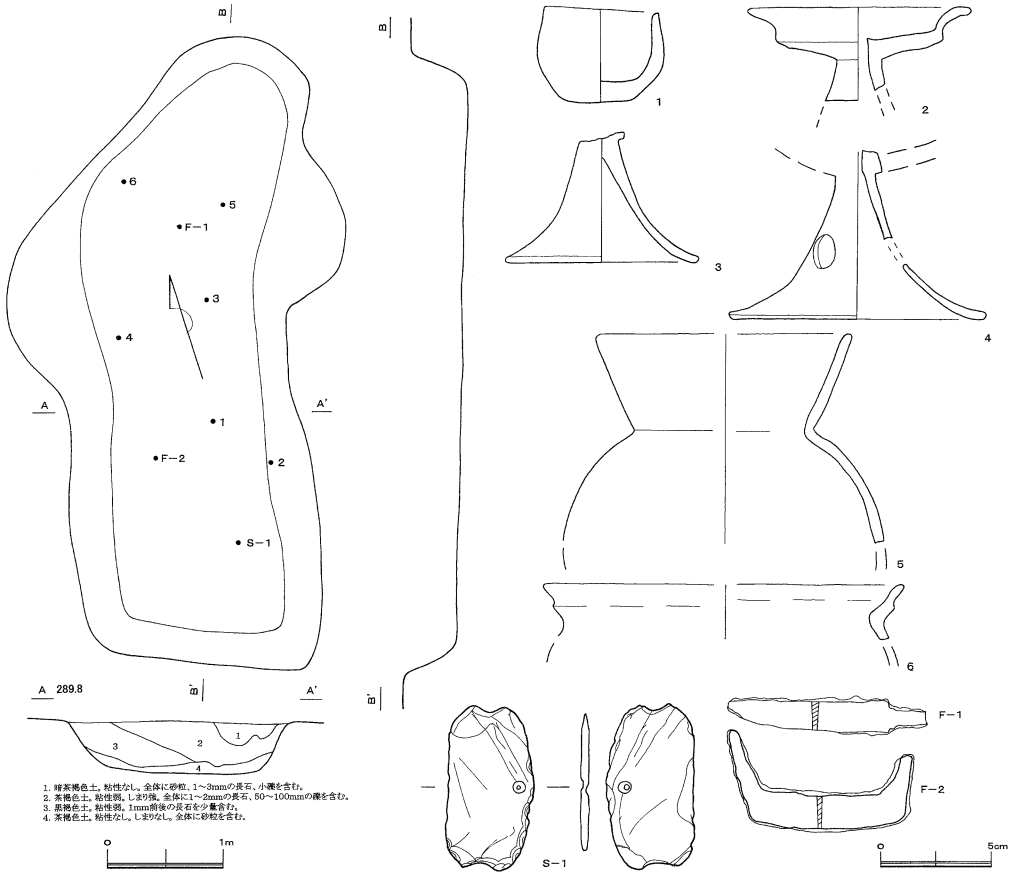
No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形・技法の特徴
1	土製品	紡錘車	長軸 4.75cm 短軸 4.5 cm 厚さ 1.6 cm	キメ細かく緻密	茶褐色	良	中心に直径0.8cmの円孔を持つ。 全体にヘラ磨きが施されている。
2	土師質土器	小皿	器高 2.6 cm 口径 10.0 cm 底径 4.6 cm	金雲母を含み キメ細かく緻密	茶褐色	良	底部糸切痕。 ロクロ右回転。
3	土師器	台付甕	現存器高 3.2 cm	キメ粗く 長石、石英を含む	内面 淡茶色 外面 茶褐色	良	内面ナデ仕上げ。
4	土師器	高坏	推定口径 16.6 cm	キメ細かく緻密	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。



第16図　2号竪穴状遺構・出土遺物

【第7表】　2号竪穴状遺構出土遺物観察表

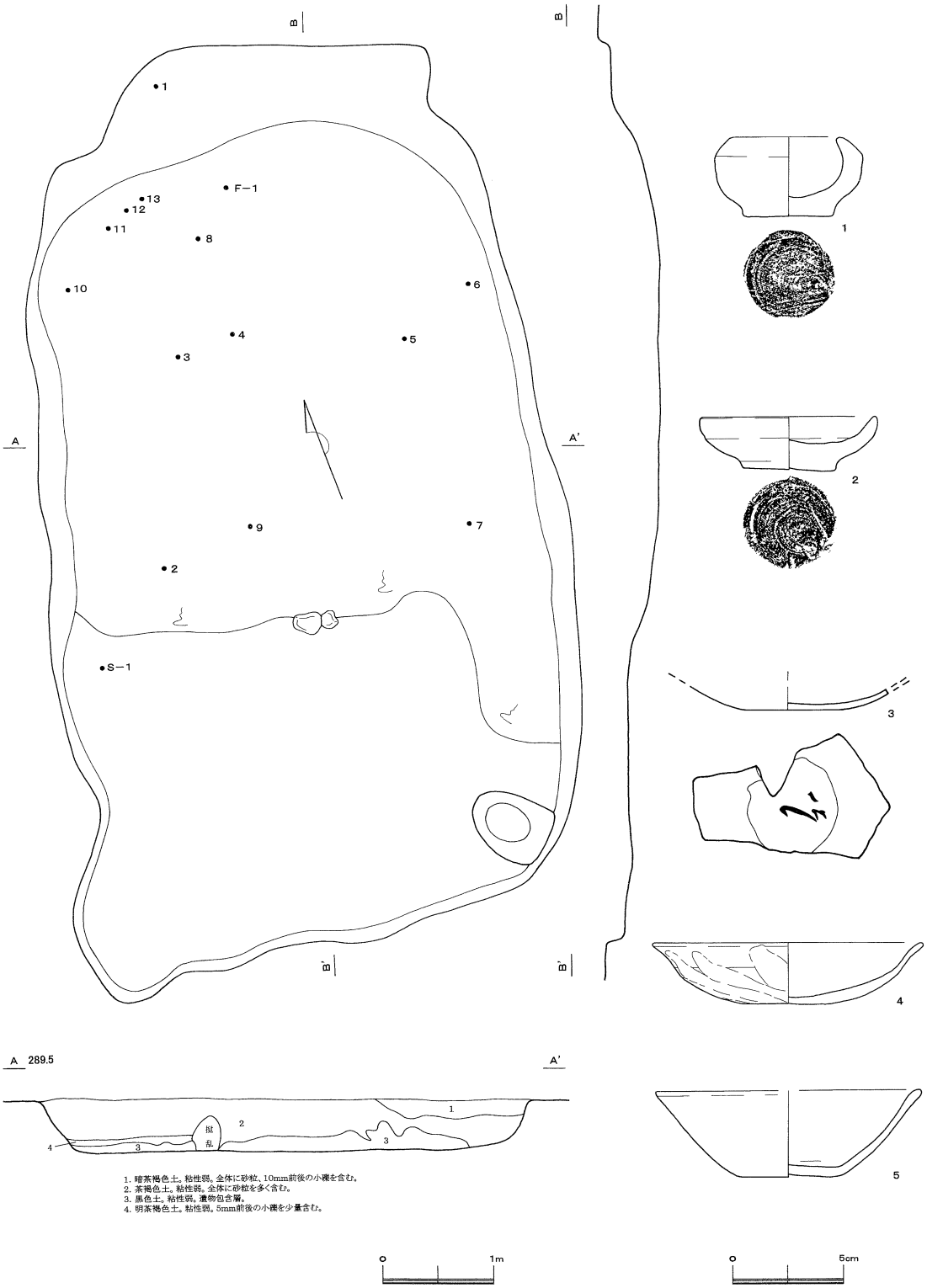
No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形・技法の特徴
1	土師質土器	小皿	器高 2.65cm 口径 9.5 cm 底径 4.4 cm	金雲母を多く含む	暗茶褐色	良好	底部糸切痕。 ロクロ右回転。
2	土師質土器	小皿	器高 2.5 cm 口径 9.7 cm 底径 5.0 cm	金雲母を多く含む	暗茶褐色	良	底部糸切痕。 ロクロ右回転。
3	土師質土器	小皿	推定器高 1.8 cm 推定口径 9.1 cm 底径 5.7 cm	金雲母を多く含む	暗茶褐色	良	底部糸切痕。



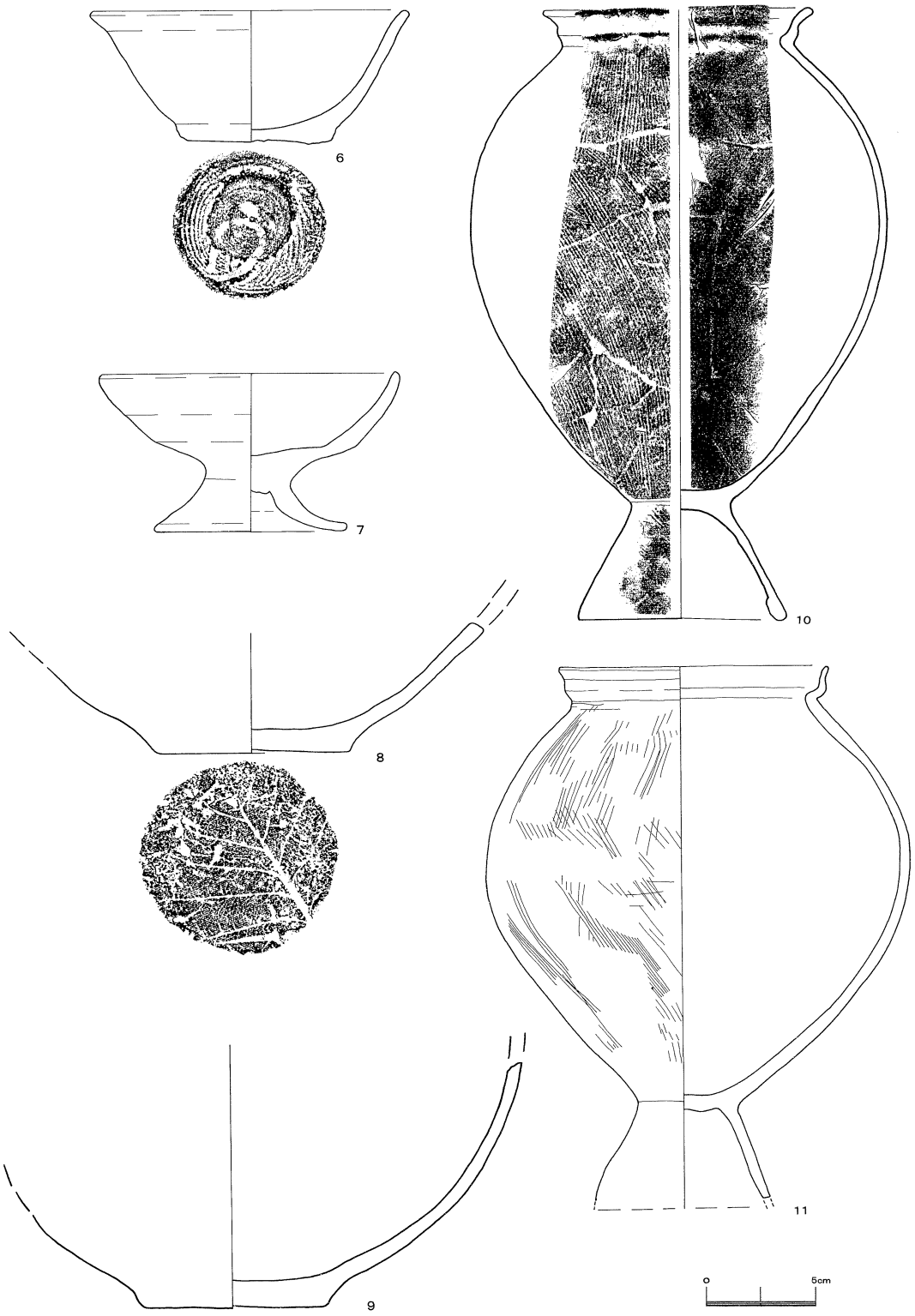
第17図　3号竪穴状遺構・出土遺物

【第8表】　3号竪穴状遺構出土遺物観察表

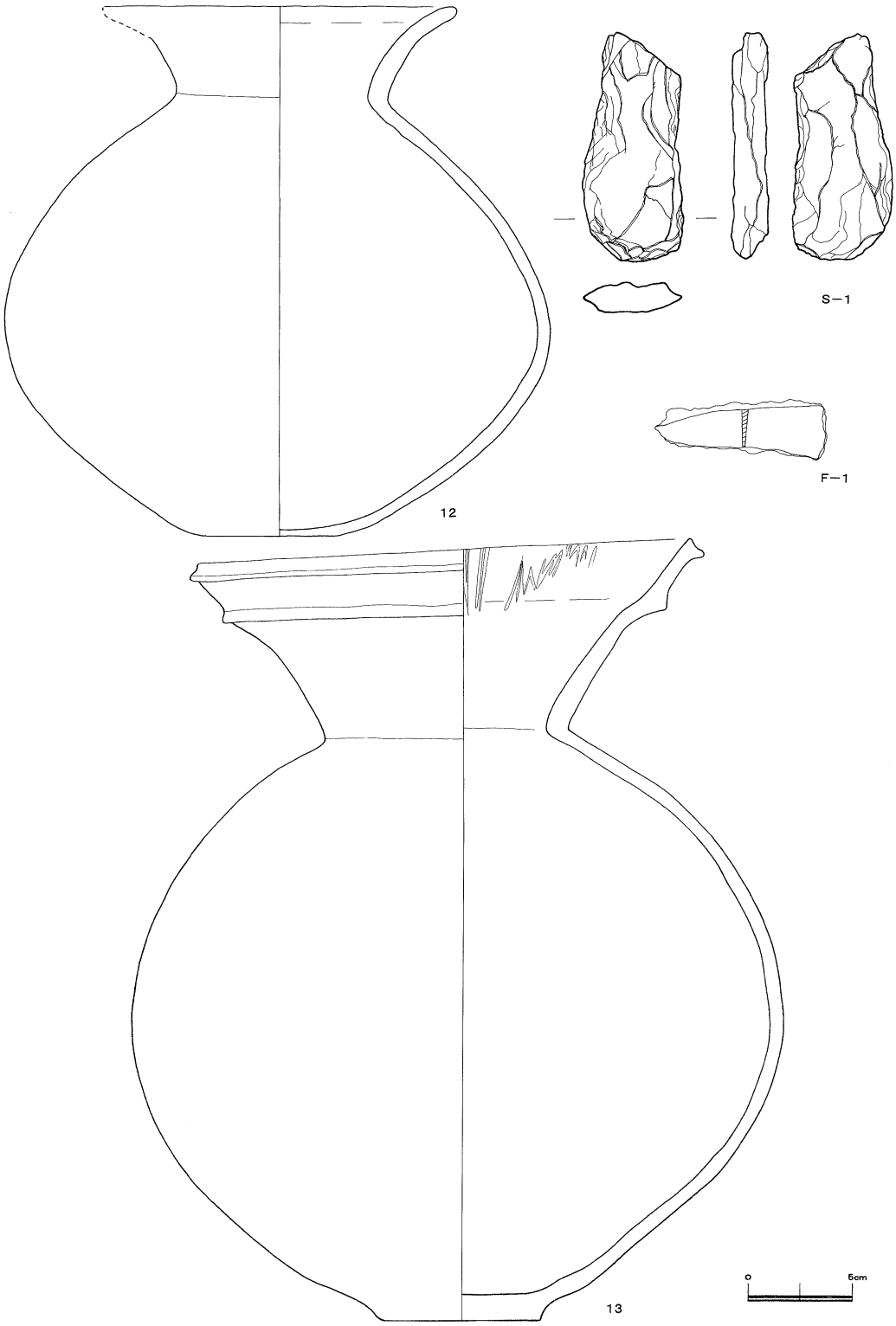
No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形・技法の特徴
1	土師器	ミニチュア土器	器高 4.5 cm 口径 5.05cm 底径 2.0 cm	石英、金雲母を含む	茶褐色	良	全体を横ナデ仕上げ。
2	土師器	器台	口径 9.0 cm	キメ細かく緻密	茶褐色	良	器受部中央に直径1.2cmの円孔を有す。 口辺部横ナデ仕上げ。
3	土師器	高坏	底径 8.8 cm	キメ細かく緻密	茶褐色	良	裾部横ナデ仕上げ。 内・外面脚部ヘラ磨き。
4	土師器	器台	推定底径 11.4 cm	キメ細かく緻密	茶褐色	良	脚部に直径1.3cmの円孔が3ヶ所穿たれている。 器受部中央に直径0.8cmの円孔を有す。
5	土師器	坩	推定口径 11.2 cm	キメ細かい	淡茶褐色	良	外面口辺部から胴上半部にかけて縦方向のヘラ磨き。内面口辺部から頸部にかけて斜め方向のヘラ磨き。
6	土師器		推定口径 15.8 cm	キメ細かい	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。
S-1	石製品	石錘	最大長 7.5 cm 最大幅 3.9 cm 最大厚 0.7 cm	石材　粘板岩			
F-1	鉄製品	刀子	現存長 9.1 cm 幅 1.4 cm				
F-2	鉄製品	鋤先	現存長 4.7 cm 幅 8.1 cm				



第18図　1号祭祀遺構・出土遺物（1）



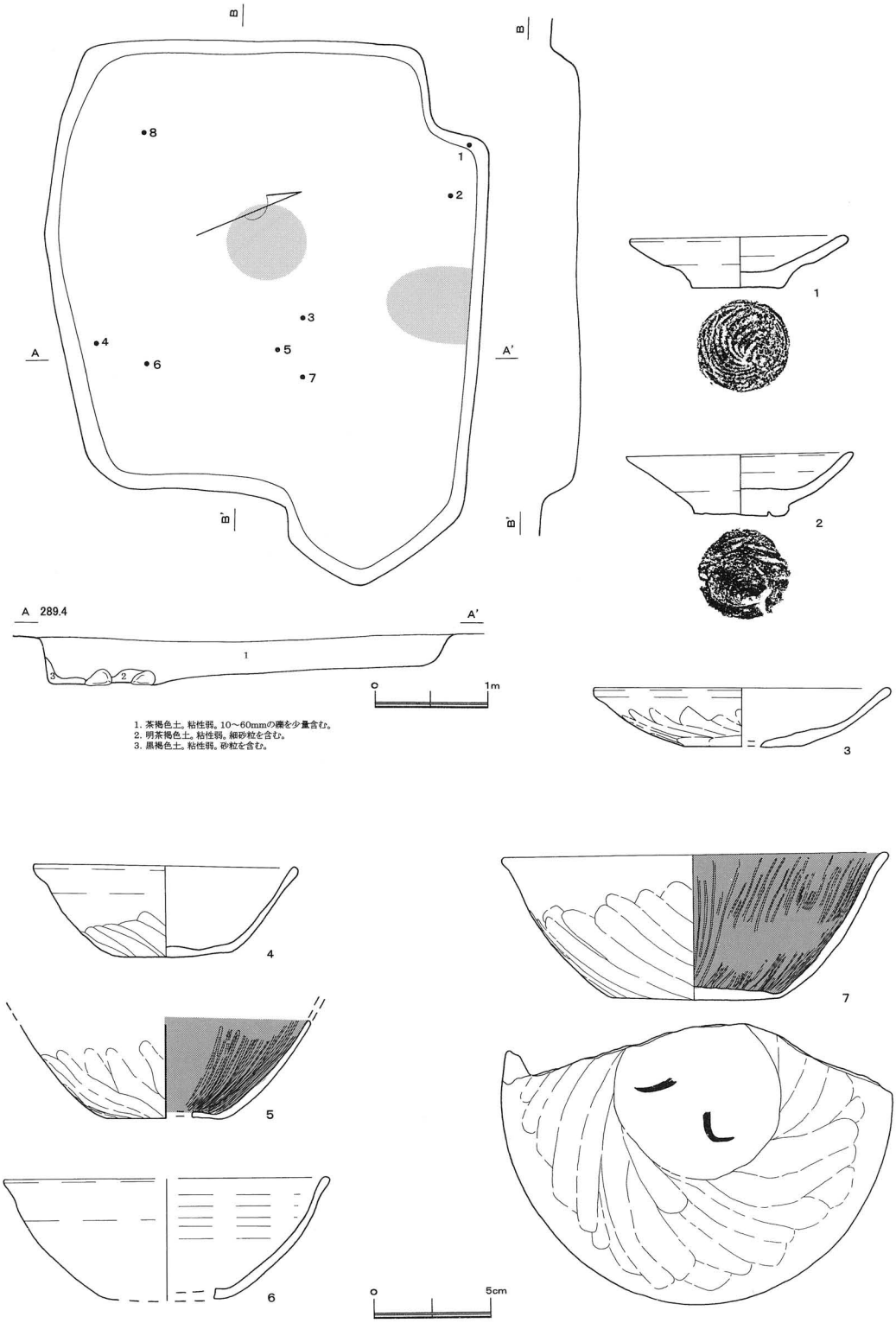
第19図　1号祭祀遺構・出土遺物（2）



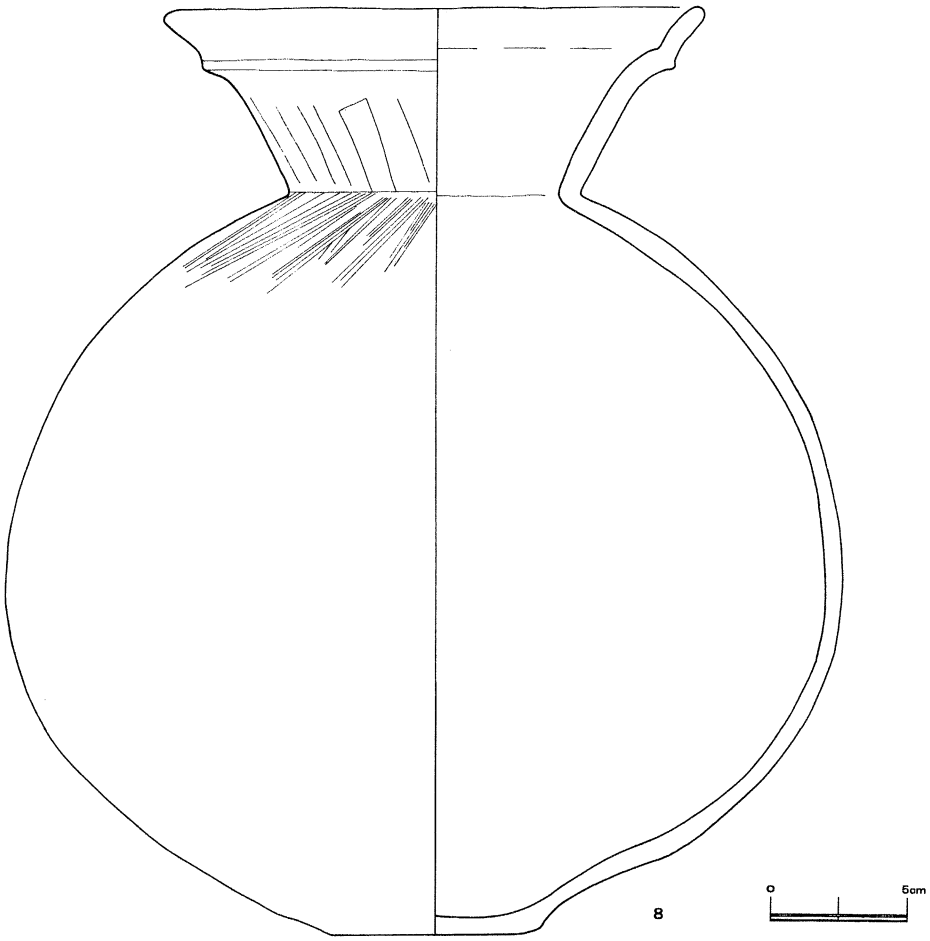
第20図　１号祭祀遺構・出土遺物（３）

【第９表】　１号祭祀遺構出土遺物観察表

No	器種	器　形	計　測　値	胎　土	色　調	焼成	器形・技法の特徴
1	土師質土器	ミニチュア土器	器高 3.7 cm 口径 4.8 cm 底径 4.2 cm	金雲母を多く含む	暗茶色	良好	内･外面体部及び口辺部横ナデ仕上げ。 底部糸切痕。
2	土師質土器	小　皿	器高 2.45cm 口径 8.0 cm 底径 4.3 cm	金雲母を含む	淡茶色	良	内･外面体部及び口辺部横ナデ仕上げ。 底部糸切痕。
3	土師器	皿	底径 4.1 cm	赤色粒子を含む	淡茶色	良	外面底部及び体部ヘラ削り。 外面底部に「ル」の墨書有り。
4	土師器	皿	器高 2.85cm 口径 12.35cm 底径 4.0 cm	赤色粒子を含む	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 外面底部及び体部ヘラ削り。
5	土師質土器	坏	推定器高 4.0 cm 推定口径 12.2 cm 推定底径 4.6 cm	赤色粒子を含む	橙褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。 外面底部及び体部ヘラ削り。
6	土師器	坏	器高 6.15cm 口径 14.6 cm 底径 7.0 cm	金雲母を多く含みキメ細かい	暗茶褐色	良好	内･外面体部及び口辺部横ナデ仕上げ。 底部糸切痕。
7	土師器	高　坏	器高 7.4 cm 口径 13.6 cm 底径 8.7 cm	キメ細かく緻密	茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。 外面体部及び脚部ヘラ削り。
8	土師器	壷	底径 9.2 cm	長石、雲母を含みキメ粗い	茶褐色	やや良	内面胴部及び底部ハケ目。 外面胴部ヘラ磨き。 底部木葉痕。
9	土師器	壷	底径 8.4 cm	長石、金雲母を多く含む	茶褐色	良	外面胴下半部ヘラ磨き。 内面胴下半部ナデ仕上げ。 内面底部ヘラ整形。
10	土師器	Ｓ字状口縁台付甕	器高 28.6 cm 口径 12.5 cm 底径 9.8 cm	金雲母を含む	黒茶色	良	口辺部横ナデ仕上げ。外面頸部から胴上半部にかけて縦方向のハケ目。胴上半部から台部にかけて斜め方向のハケ目。
11	土師器	Ｓ字状口縁台付甕	推定器高 25.5 cm 口径 12.55cm	金雲母を含む	黒茶色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 外面頸部横方向のハケ目。外面胴上半部縦方向のハケ目。胴下半部及び台部は斜め方向のハケ目。
12	土師器	壷	器高 25.75cm 口径 17.0 cm 底径 8.0 cm	長石を含みキメ粗い	茶褐色	良	外面胴部及び内外面口辺部ヘラ磨き。
13	土師器	壷	器高 38.4 cm 口径 24.0 cm 底径 7.7 cm	長石、金雲母を多く含みキメ細かい	淡茶色	良	有段口縁。内面口辺部縦方向のヘラ磨き。 外面胴下半部に縦方向のハケ目が僅かに看取される。
S-1	石　器	打製石斧	現存長 10.9 cm 最大幅 4.7 cm 最大厚 1.7 cm	石　材 粘板岩			
F-1	鉄製品	刀　子	現存長 8.3 cm 幅 2.6 cm				



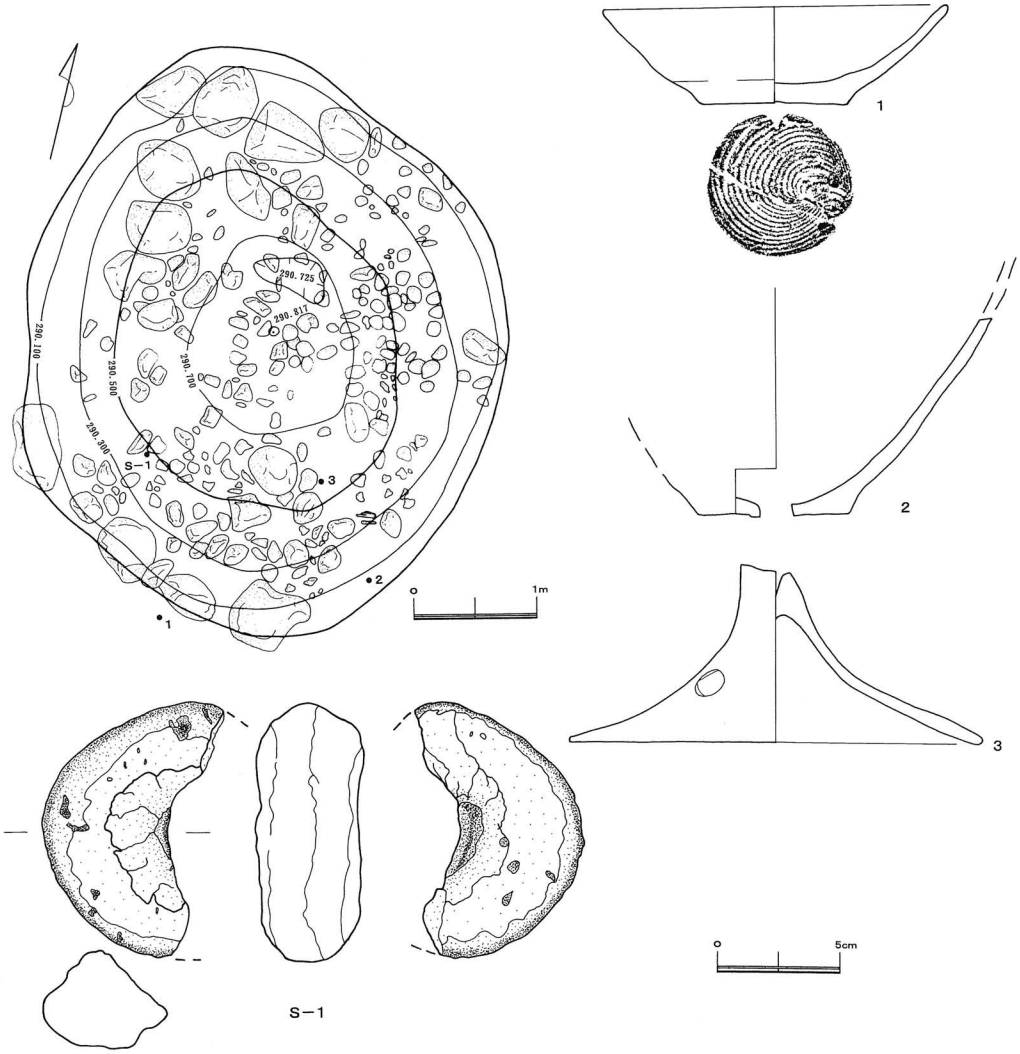
第21図　2号祭祀遺構・出土遺物（1）



第22図　２号祭祀遺構・出土遺物（２）

【第10表】　２号祭祀遺構出土遺物観察表

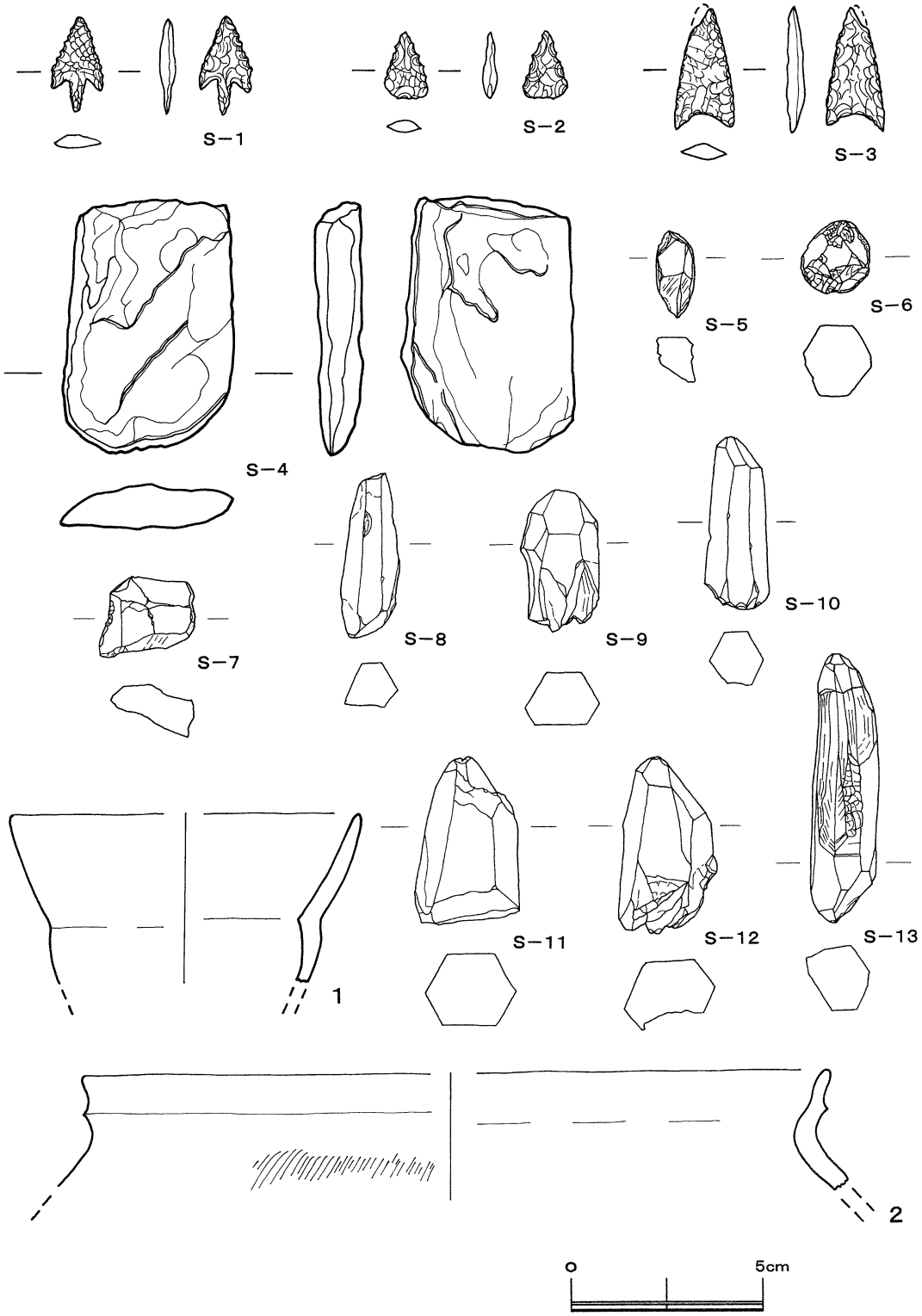
No	器種	器　形	計　測　値	胎　土	色　調	焼　成	器形・技法の特徴
1	土師質土器	小　皿	器高 2.2 cm 口径 9.3 cm 底径 4.0 cm	金雲母を多く含む	茶 褐 色	良	内･外面体部及び口辺部横ナデ仕上げ。 底部糸切痕。
2	土師質土器	小　皿	器高 2.6 cm 口径 9.8 cm 底径 3.9 cm	金雲母を多く含む	暗茶褐色	良	内･外面体部及び口辺部横ナデ仕上げ。 底部糸切痕。
3	土師器	皿	器高 2.6 cm 口径 12.8 cm 底径 5.0 cm	キメ細かく緻密	橙 褐 色	良	外面底部及び体部ヘラ削り。 口辺部横ナデ仕上げ。 内面口辺部煤付着。
4	土師器	坏	器高 4.2 cm 口径 11.4 cm 底径 5.2 cm	キ メ 細 か い	茶 褐 色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 外面体部下半ヘラ削り。 外面底部糸切後、ヘラ調整。
5	土師器	坏	推定底径 5.0 cm	キメ細かく緻密	内面 黒 色 外面 淡茶色	良好	内黒土器。 外面体部下半ヘラ削り。 内面体部ヘラ磨き。
6	土師器	坏	推定器高 5.2 cm 推定口径 13.7 cm 推定底径 5.0 cm	赤色粒子を含む	橙 褐 色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 外面体部下半ヘラ削り。
7	土師器	坏	器高 6.3 cm 口径 16.7 cm 底径 7.2 cm	キメ細かく緻密	内面 黒 色 外面 明茶褐色	良好	内黒土器。口辺部横ナデ仕上げ。 外面体部及び底部ヘラ削り。内面縦方向の暗文。 外面底部に「ハ」の墨書有り。ロクロ右回転。
8	土師器	壷	器高 34.6 cm 口径 19.4 cm 底径 8.0 cm	長石、金雲母を含み、キメ細かい	淡 茶 色	良	有段口縁。口辺部横ナデ仕上げ。 外面頸部ヘラ削り。外面胴上半部に縦方向のハケ目、胴下半部にかけて縦方向のヘラ磨き。



第23図　塚・出土遺物

【第11表】　塚出土遺物観察表

No	器種	器　形	計　測　値	胎　土	色　調	焼 成	器形・技法の特徴
1	土師質土器	坏	器高 4.1 cm 口径 14.0 cm 底径 6.0 cm	金雲母を多く含む	暗茶褐色	良好	内･外面体部及び口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ右回転。
2	土師器	甑	底径 6.2 cm	石英、金雲母を含む	橙 褐 色	良	底部中央に直径1.4cmの円孔が内側から外側に向かって穿たれている。外面胴下半部ヘラ磨き。
3	土師器	高　坏	底径 17.0 cm	キメ細かく緻密	明茶褐色	良	脚部に直径1.4cmの円孔が外側から内側に向かって３ヶ所穿たれている。裾部横ナデ仕上げ。外面脚部ヘラ磨き。
S-1	石製品	凹　石	最大幅 10.5 cm 最大厚 4.2 cm	石材　安山岩			



第24図　遺構外出土遺物

【第12表】　遺構外出土遺物観察表（石器・石製品）

No	器　種	現存長	最大幅	最大厚	重　量	石　材	グリット
S－1	有茎石鏃	2.5cm	1.3 cm	0.45cm	0.78g	黒曜石	確 認 面
S－2	尖頭器形石鏃	3.3cm	1.5 cm	0.5 cm	0.53g	黒曜石	確 認 面
S－3	尖頭器形石鏃	1.8 cm	1.2 cm	0.4 cm	1.61g	黒曜石	確 認 面
S－4	打製石斧	6.6 cm	4.5 cm	1.25cm		粘板岩	確 認 面
S－5		2.3 cm	1.0 cm	1.2 cm		水　晶	C － 7
S－6	水晶製丸玉	1.9 cm	直径　1.9 cm			水　晶	C － 7
S－7		1.9 cm	2.4 cm	0.9 cm		水　晶	C － 7
S－8		4.1 cm	1.5 cm	1.2 cm		水　晶	C － 7
S－9		3.8 cm	2.05cm	1.4 cm		水　晶	C － 7
S－10		4.5 cm	1.7 cm	1.45cm		水　晶	C － 7
S－11		4.3 cm	2.75cm	1.9 cm		水　晶	C － 7
S－12		4.6 cm	2.5 cm	1.55cm		水　晶	C － 7
S－13		7.1 cm	1.7 cm	1.7 cm		水　晶	C － 7

【第13表】　遺構外出土遺物観察表（土器）

No	器種	器　形	計　測　値	胎　土	色　調	焼 成	器形・技法の特徴	グリット
1	土師器	坩	推定口径　9.0 cm	キメ細かい	明茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 内面口辺部ヘラ磨き。	C－6
2	土師器	S字状口 縁台付甕	推定口径 19.3 cm	金雲母、石 英を含む	明茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 外面頸部から斜め方向のハケ目。	C－6

第３章　御岳田遺跡出土水晶について

山梨県は山々に囲まれた環境下にあって、古くから天然の水晶を多く産出する地域として知られてきた。水晶の原産地に近接する縄文時代の集落跡からは、水晶を用いた石器が確認され、また古墳時代には水晶を利用した首飾りのパーツが盆地全域に造られた古墳の多くから認められる。例えば４世紀後半代に築造された関東屈指の前方後円墳である甲斐銚子塚古墳では水晶製の勾玉が４点認められ、６世紀代になって遺営される群衆墳からは切子玉等の水晶製玉類の出土が知られている。実際水晶の硬度は実用品である石器に適し、また透明感のある美しさは装飾品だけでなく現代でも呪術的な意味合いを持つ道具として用いられるなど、各方面で多用されている。

本遺跡の落ち込み部分からは８点の水晶原石と１点の水晶製丸玉未製品がまとまって出土した。水晶の原石はほとんどが六角柱で、黄茶褐色の付着物が観察できるものもある。水晶製丸玉未製品は六角柱を呈する水晶原石の柱頭及び柱尾を削り取った多面体の状態である。六面体を観察することが可能で、この後六面体を構成する稜線部分を研磨し、丸玉へ形成した上で、紐を通す孔を穿孔するものと推定できる。この資料は県内の水晶製丸玉の製作過程を知る貴重な資料である。遺構が明確でなく玉製作に関連する遺物の出土も見られないことから、直ちに玉作り工房跡であると断定はできないが、今まで県内では発見されていなかった玉作り工房跡の存在をおおいに示唆するものである。共伴する土器群の年代観から、これらの資料は４世紀後半代に位置づけることが可能である。

水晶製玉類の製作は弥生時代中期から見られる。京都府弥栄町奈具岡遺跡はその代表的なものであり、水晶を含む玉類の施策に携わった工房跡である竪穴住居跡36軒が確認されている１)。また弥生時代後期から古墳時代前期にかけて山陰地方では盛んに水晶製玉類の製作が行われる。当地では古墳時代の玉作り遺物に一貫して水晶が用いられていることから、やがて水晶製切子玉へ発展していくと推定される２)。

さて本遺跡と同時期に関東地方で営まれていた玉作り遺跡は、神奈川県・千葉県・茨城県・埼玉県・群馬県等で確認されており、そのほとんどは碧玉や緑色凝灰石を用いた管玉の製作が中心となっている。また瑪瑙材を用いて勾玉を製作したものや滑石を用いたものも若干見受けられる。これらのほとんどは古墳時代前期以降、継続することなく消滅する３)。一方この時期、長野県においても社軍人遺跡等の玉作り遺跡が発掘調査されている。このように見てきた時、本遺跡に玉作り工房跡が存在したとするならば、関東甲信地方で興る玉作り集団の一つともいえよう。

このようにして製作された水晶製の玉類がいったいどこへもたらされたのかは不明である。県内の該期の古墳及び集落からはいずれも水晶製丸玉の出土は認められていない。今後これら盆地内で製作された玉類が、どのように供給されたのか、そのルートを知ることで該期の交易範囲を推定することができる。本遺物は本県においてこれまで未解明であった製作技術の一つを知る上で極めて貴重な資料であると言える。

１）増田孝彦・田代弘　1993　「奈具岡遺跡」　『京都府遺跡調査概報第55冊』　（財）京都府埋蔵文化財調査センター
２）川村好密　1986　「玉生産の生産と流通」　『岩波講座　日本考古学』　第３巻　岩波書店
３）寺村光晴　1975　『古代玉作形成史の研究』　吉川弘文館

（石神孝子）

第4章　ま　と　め

敷島町にはこれまでの発掘調査によって、南北に２本の微高地（尾根）が存在することが確認されている。現在肉眼ではほぼ平坦地形を呈しているが古代においては、東西に河川と微高地が連続して存在していたものと考えられる。そして、この微高地上に遺跡の分布が認められている。御岳田遺跡は敷島町西側に位置する微高地上に営まれた集落跡と言えよう。御岳田遺跡の南約500ｍを中心に広がる環濠集落遺跡金の尾遺跡も御岳田遺跡と同じ微高地上に営まれた遺跡であり、今後両遺跡の関連性にも注目したい。

御岳田遺跡は、住居跡が６軒と比較的少なかったが、微高地上での遺跡の存在や古墳前・中期、平安後期の住居の発見によって、これまで空白であった甲府盆地北西部荒川右岸地域の同時期集落形成の一端を解明することができた。

【古墳時代】

現在山梨県における３世紀から５世紀にかけての土器編年については幾つかの論考が提出され、ある程度の時期区分が定着しつつある。

御岳田遺跡から出土した古墳期の土器についても、出土遺構ごとにそれぞれ様相が異なる。第14表は遺構時期分類である。

古墳時代の遺構、遺物はすべて前期から中期に位置付けられるものであり、一つの特徴を示す。

先にも記したが、遺跡南方約500ｍを中心に広がる弥生時代後期の環濠集落金の尾遺跡の第６次調査において、環濠が１ｍほど堆積した時期に４世紀末から５世紀代にかけての器台や壺型土器などが多量にあたかも投棄されたかのような状況で出土している。金の尾遺跡内において、当該期の住居跡は１軒しか確認されておらず、今後両遺跡の相関関係に注目したい。

御岳田	遺　構　名	時　　期
Ⅰ	１号住居・３号竪穴 （６号住居）	４Ｃ中～５Ｃ初
Ⅱ	５号住居	４ 世 紀 末 葉
Ⅲ	１・２号祭祀	５ 世 紀 初 頭
Ⅳ	２号住居	５ 世 紀 後 半
Ⅴ	３号住居・２号祭祀	10Ｃ 中 ～ 後 半
Ⅵ	４号住居・（６号住居） ２号竪穴・２号祭祀	12 世 紀 初 頭
不　明	１号竪穴	

【14表】　遺構時期分類

また、塚南側の若干凹地のような場所から出土した水晶の一括品は、付近の同レベルで出土している広口口縁の丸底土器などの年代から４世紀末から５世紀初頭にかけてのものと認識したい。

【平安時代】

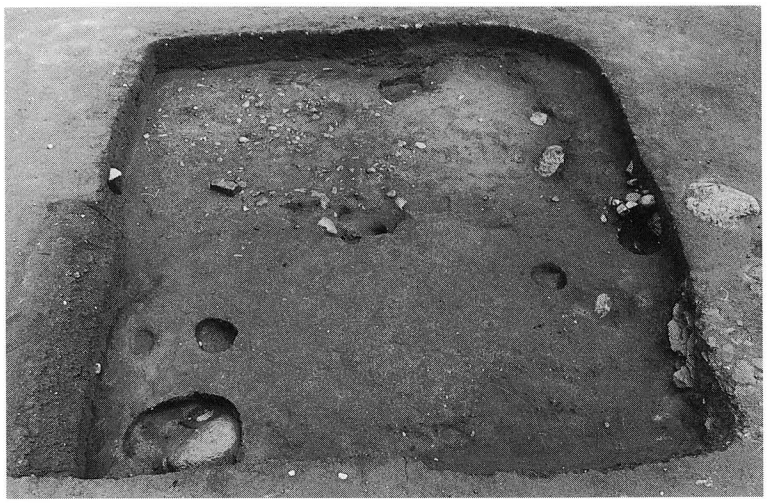
遺跡東側に位置する微高地上に形成された松ノ尾遺跡は、当該期の集落遺跡として知られている。松ノ尾遺跡との対比など遺跡の調査が進展するにつれ、平安期の集落構造の理解が進むであろう。

写　真　図　版

図版 1

御岳田遺跡全景（南より）

図版 2



1 号住居跡（南より）

2 号住居跡（東より）

3 号住居跡（南より）

1 ～ 3 号住居跡全景

図版３

４号住居跡（東より）

５号住居跡（東より）

６号住居跡（南より）

４～６号住居跡全景

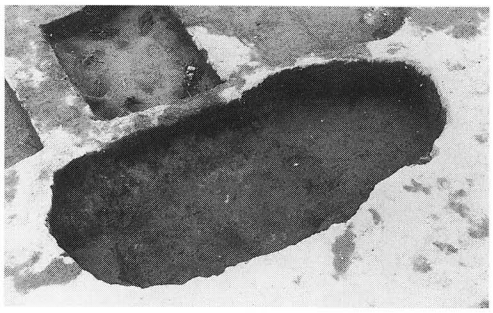
1号竪穴状遺構（東より）

3号竪穴状遺構（南より）

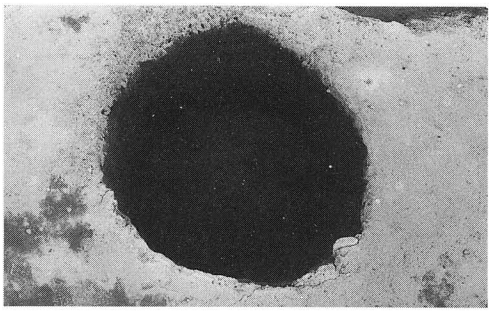
1号祭祀遺構（東より）

1・3号竪穴状遺構、1号祭祀遺構全景

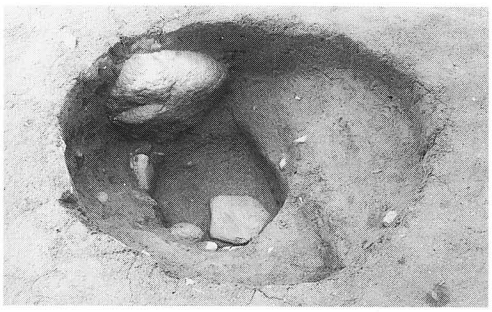
図版5



1号土坑



2号土坑



3号土坑

4号土坑

5号土坑

6号土坑

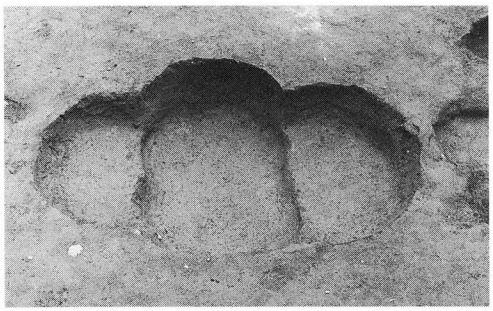
7号土坑

8号土坑

10号土坑

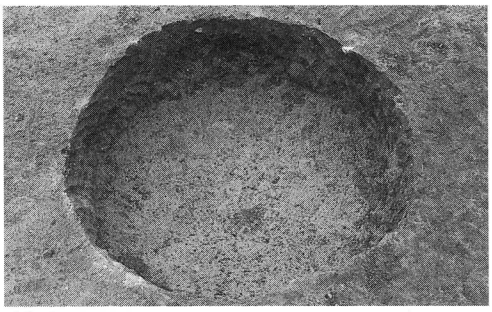
11号土坑

1～11号土坑全景

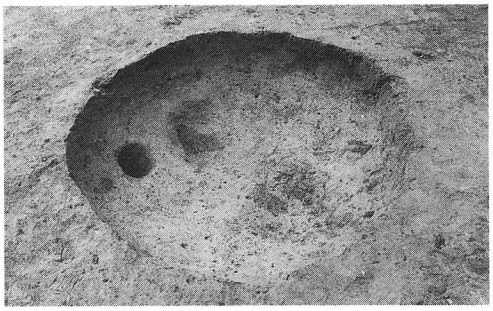


12号土坑

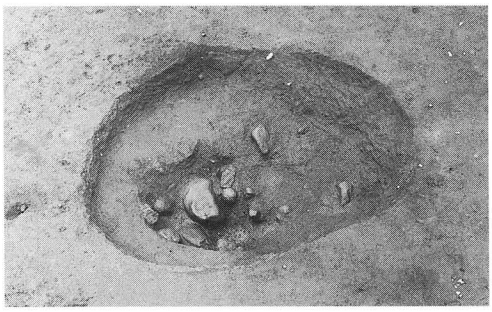
13号土坑



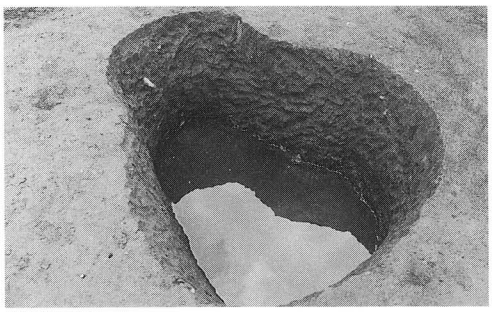
14号土坑



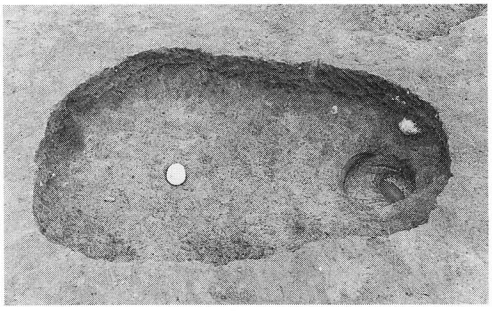
15号土坑



16号土坑

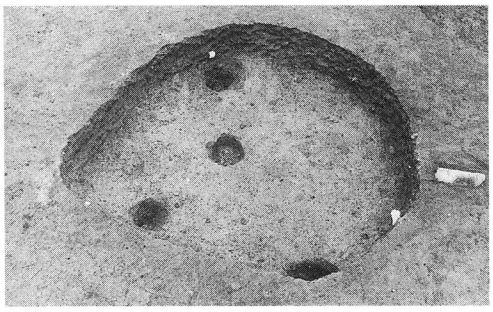


17号土坑

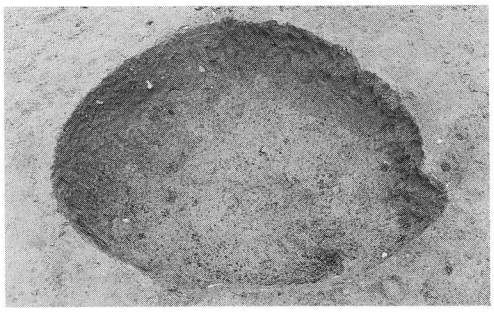


18号土坑

19号土坑



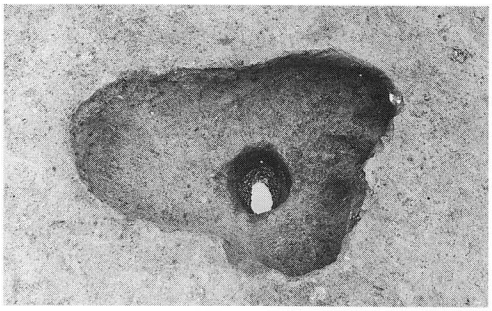
20号土坑



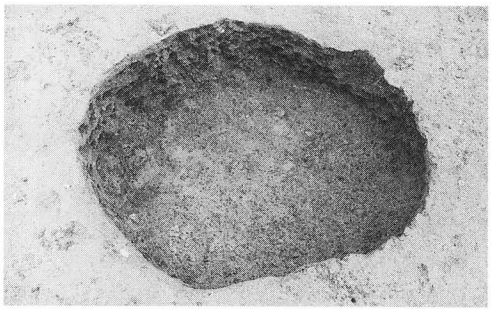
21号土坑

12～21号土坑全景

図版 7

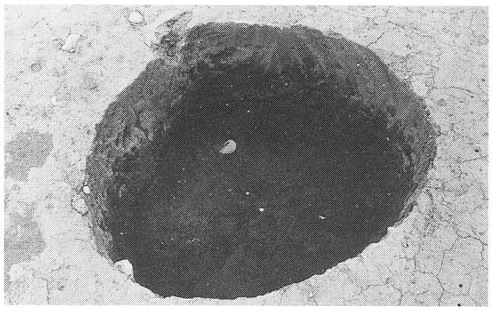


22号土坑

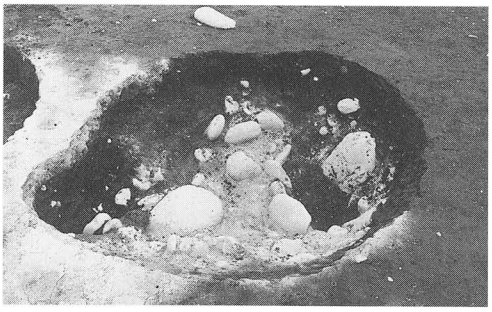


23号土坑

24号土坑



25号土坑

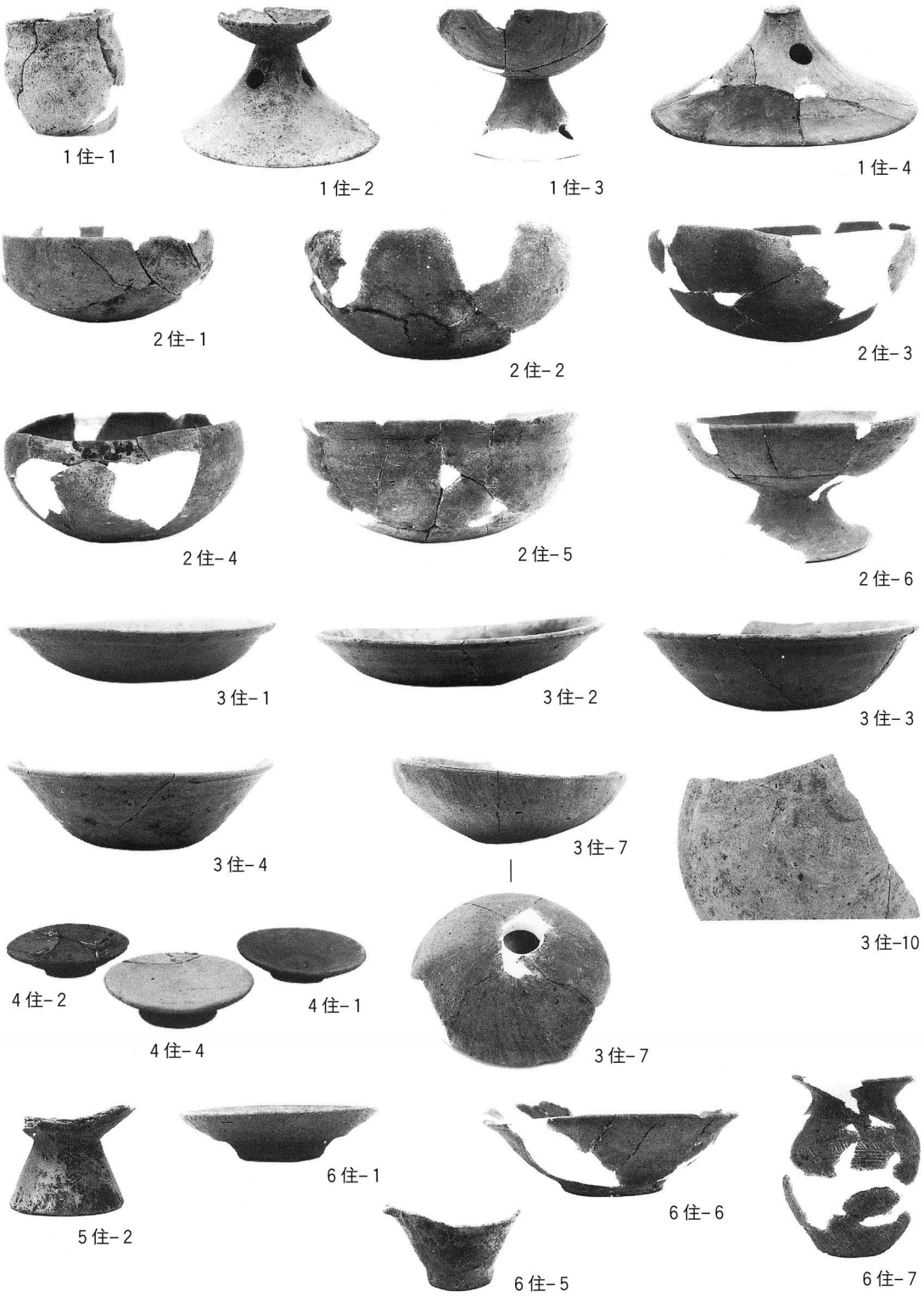


26号土坑

27号土坑

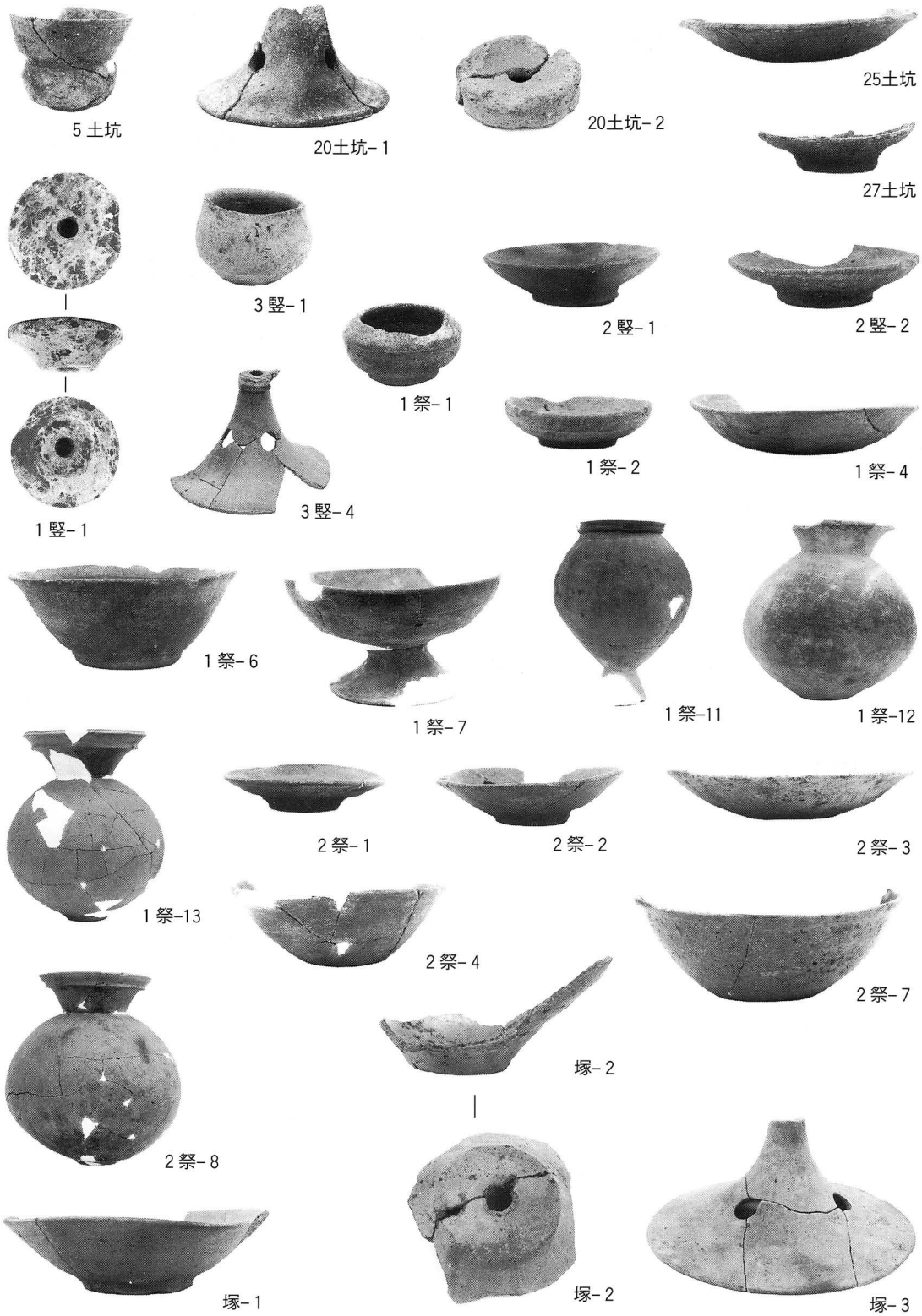
塚全景（南西より）

22～27号土坑、塚全景

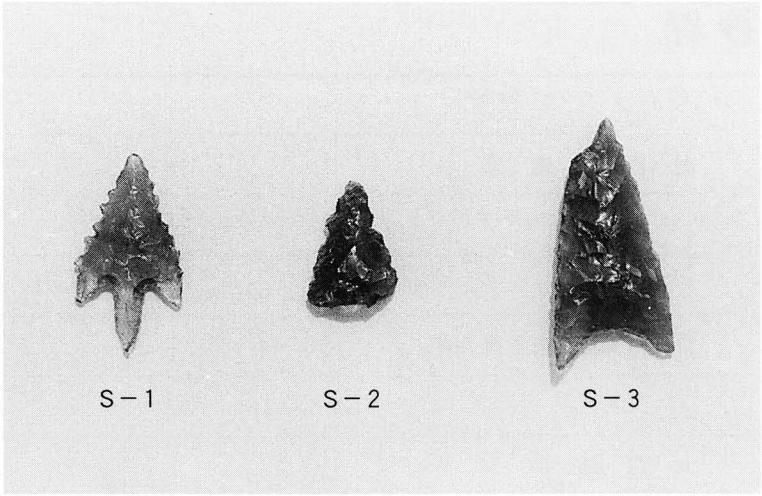

1住-1
1住-2
1住-3
1住-4
2住-1
2住-2
2住-3
2住-4
2住-5
2住-6
3住-1
3住-2
3住-3
3住-4
3住-7
3住-10
4住-2
4住-1
4住-4
3住-7
5住-2
6住-1
6住-6
6住-5
6住-7

住居跡出土遺物

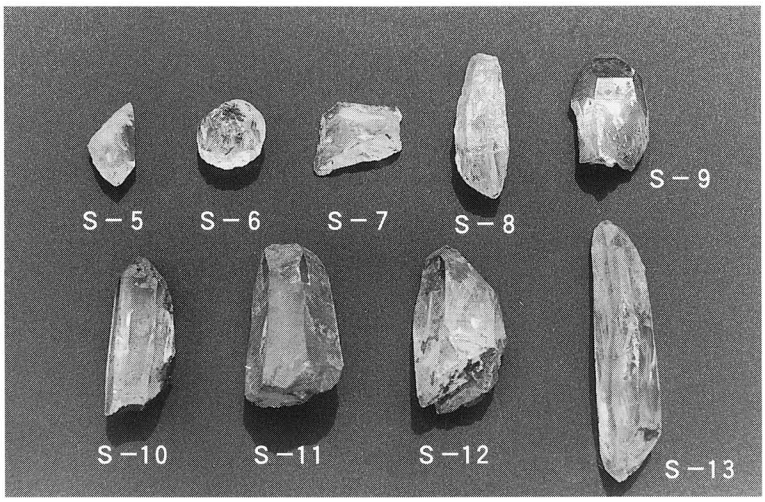
図版 9


5 土坑
20土坑-1
20土坑-2
25土坑
27土坑
3 竪-1
2 竪-1
2 竪-2
1 祭-1
1 祭-2
1 祭-4
1 竪-1
3 竪-4
1 祭-6
1 祭-7
1 祭-11
1 祭-12
1 祭-13
2 祭-1
2 祭-2
2 祭-3
2 祭-4
2 祭-7
塚-2
2 祭-8
塚-1
塚-2
塚-3

遺構出土遺物



遺構外遺物　石器



遺構外遺物　水晶

遺構外出土遺物・調査参加者

報告書抄録

ふりがな	みたけだいせき
書名	**御岳田遺跡**
副書名	
巻次	
シリーズ名	敷島町文化財調査報告書
シリーズ番号	8
編著者名	大嶌正之
編集機関	敷島町教育委員会
所在地	〒400-0123　山梨県中巨摩郡敷島町島上条1020
発行年月日	平成11年（1999）9月13日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
御岳田遺跡（みたけだいせき）	山梨県 中巨摩郡 敷島町大下条 963	193828	7			平成5年 4月7日～ 平成5年 7月12日	1500	民間店舗 建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
御岳田遺跡	集落跡	古墳時代 平安時代	住居跡 6 土坑 27 祭祀跡 2	土師器 坏・皿 壺	水晶製丸玉未製品の出土

敷島町文化財調査報告　第8集

御岳田遺跡

発行日　1999年（H11）9月13日
発行　敷島町教育委員会
山梨県中巨摩郡敷島町島上条1020
TEL（055）277－4111
印刷　有限会社　佐藤印刷企画